

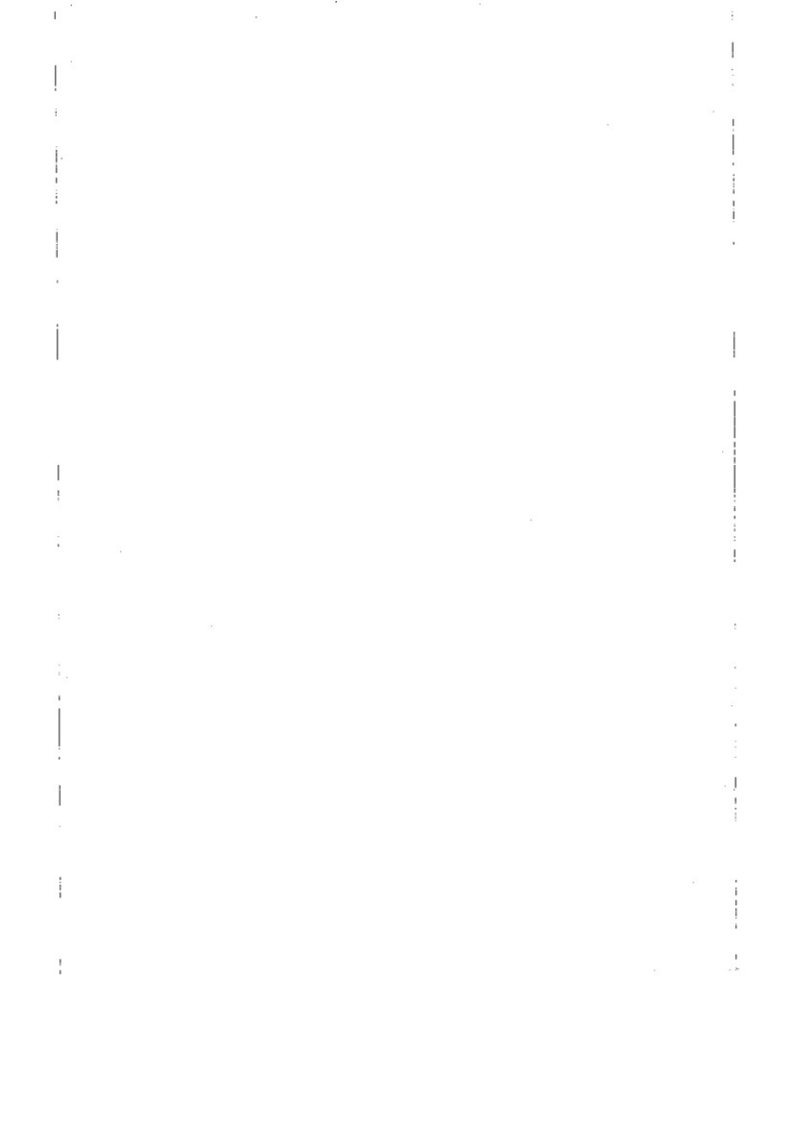
登別市

亀田公園遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



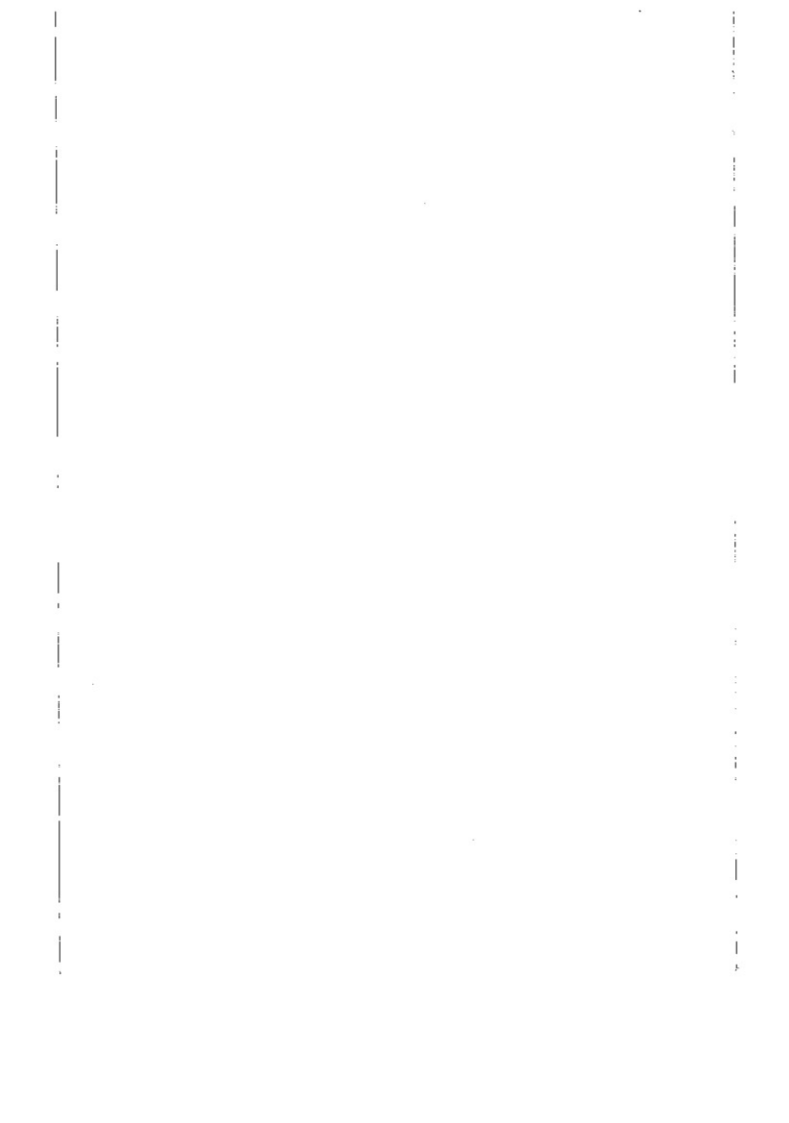
登別市

亀田公園遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

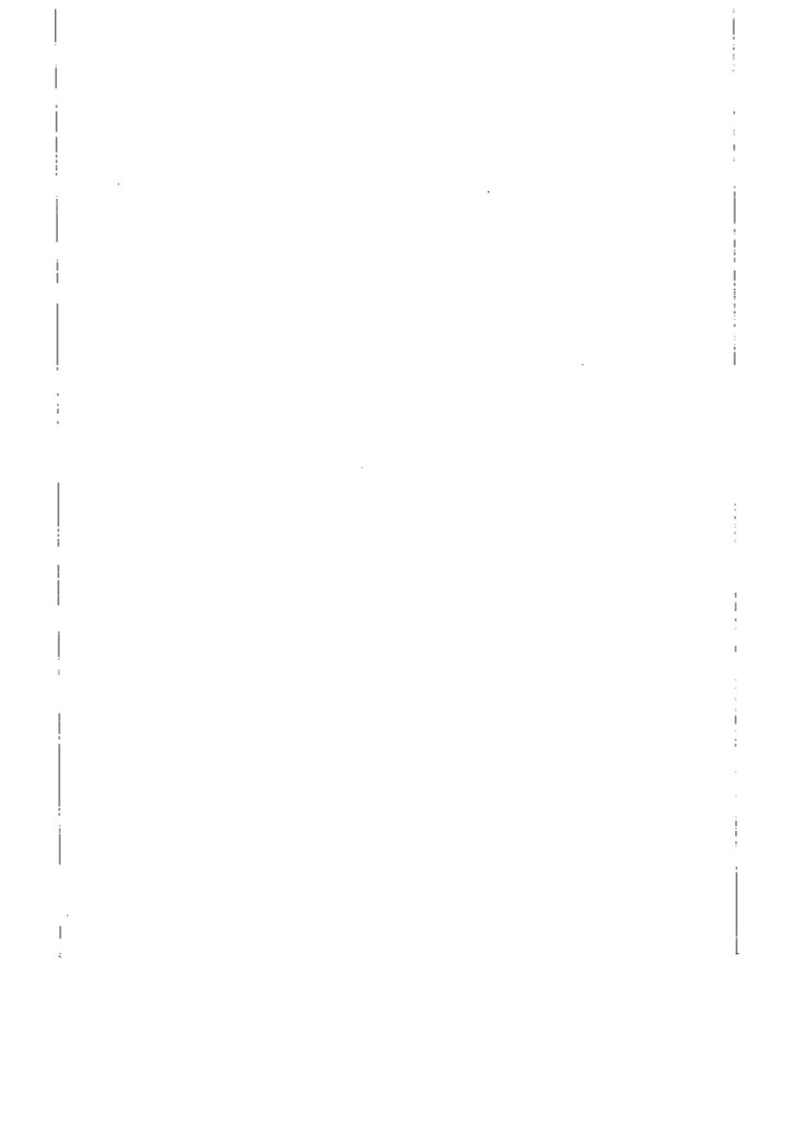
昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





遺跡周辺の空撮写真



例 言

1. 本報告書は、北海道縦貫自動車道建設用地のうち登別一虻田間予定地の、昭和61年度、旭産文化財発掘調査に関するものである。
2. 本書の作成は、三浦正人・田才雅彦・田中哲郎が、項目別に分担し、それぞれ文末に文責を明示した。地形・火山灰については、調査第四班 花岡正光が担当した。写真に関しては三浦が、図面関係は田才・田中が担当した。編集は三浦が担当した。
3. 土器の拓本・断面実測は、主として、中嶋政子・伊藤幸子・藤内まゆみが、石器の実測・トレースは主に、木下昭仁が行った。
4. 巻頭のカラー写真は、日本道路公団が昭和60年10月15日に撮影した、北海道縦貫自動車道虻田一登別間の子定線の空撮写真（1：10,000）No.3822を、複製・縮小したものである。
5. 住居跡・炭焼窯跡・土層断面実測図：60分の1、土壙・焼土実測図：40分の1、土器拓影図：3分の1、石器実測図：2分の1（No.33は4分の1）に各々統一してある。
6. 遺構規模の数字は、長径（長軸）×短径（短軸）×確認面からの最深（厚さ）mである。竪穴の面積は、プランメーターで、実測図の下端ラインをなぞって測定した。
7. 文章中、図中には、次の略号を使用している。
住居跡：H 土壙：P 焼土：F
8. 遺物のNoは、土器・石器等ごとにNo.1から付し、図・写真・分布図と統一してある。
9. 発掘作業従事者： 木村 哲朗，小川 秋雄，阿野ツキ子，江崎 満子，落合 泰子
街道千恵子，春日 優子，木曾真知子，木田智恵子，黒沢まり子，桜井百合子
柴山 郁子，嶋貫美枝子，霧島ヨシ子，須貝 淑子，高橋英美子，千葉 悦子
堂嶋 桂子，長濱 弘子，長浜富美子，中谷智恵子，新岡美和子，西永 之恵
浜田 幸子，半谷 直美，深沢美千代，藤原キエ子，星 れい子，細野ユミ子
増田 洋子，村上 律子，壺谷ミツエ，山崎美智子，山田 綾子
10. 調査にあたっては、北海道教育委員会社会教育部文化課の指導をいただいた。また、次の機関、諸氏より協力、助言を得た。深く感謝申し上げます。（順不同、敬称略）
登別市教育委員会 登別市亀田記念公園管理事務所 登別市立郷土資料館
美中興業株式会社・北土建設株式会社共同企業体道央自動車道富岸工業作業所
道立登別南高等学校 街道重昭 道立登別高等学校 宮武神一
登別市立登別中学校 稲葉哲哉 登別市役所社会課 千葉貢三
登別市富岸町 小林太郎 白老町アイヌ民族博物館 伊藤裕満
足立区立足立第十中学校 山崎直行 北海道考古学会 神田正衛

目 次

巻頭写真

例 言

I 調査の概要

1. 調査要項 3
2. 調査体制 3
3. 調査の経緯 3
4. 調査の概要 5
 - 1) 発掘区の設定 5
 - 2) 土層の区分 5
 - 3) 調査のあらまし 7

II 遺跡の位置と環境

1. 位置と環境 13
2. 地 形 16
3. 完新世の火山灰について 16

III 遺構と遺物

1. 概 要 21
2. 住居跡 23
3. 土 壇 34
4. 焼 土 43
5. 遺 物 44
 - 1) 土 器 44
 - 2) 石器等 53
6. 炭焼痕跡 62

IV ま と め 64

- 引用参考文献 65

I 調査の概要

1. 調査要項

- 事業名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者：日本道路公団札幌建設局
事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名：亀田公園遺跡（北海道教育委員会登録番号 J-03-9）
所在地：登別市富岸町58-3（亀田記念公園奥）
調査面積：2,355㎡
調査期間：昭和61年4月1日～昭和62年3月31日（発掘調査 6月26日～9月5日）

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長	植村 敏	業務部長	間宮 道男
調査部長	中村 福彦	調査第二班長	種市 幸生
文化財保護主事	三浦 正人（発掘担当者）		
"	田才 雅彦		
"	田中 哲郎		

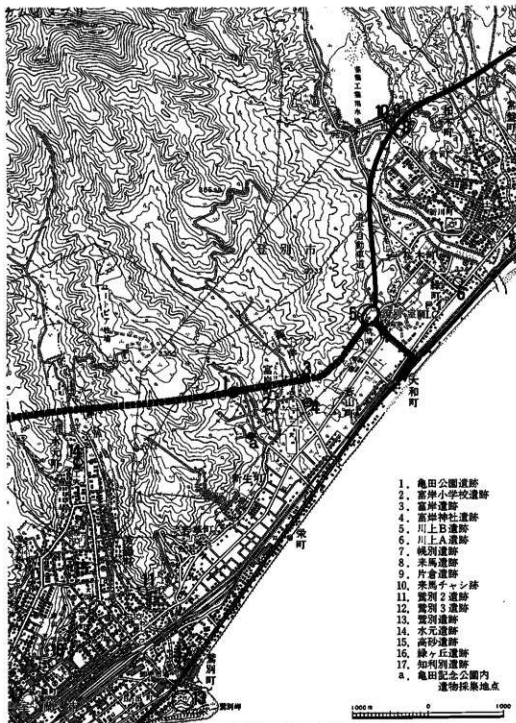
北海道教育委員会社会教育部文化課

文化財保護主事 青柳 文吉（昭和61年8月25日～9月5日）

3. 調査の経緯

この調査は、日本道路公団が進めている北海道縦貫自動車道建設の工事用地内にある、埋蔵文化財包蔵地の調査である。亀田公園遺跡は、昭和42年発行の「登別町史」に、縄文時代中期～後期の遺物包含地として記載され、昭和55年4月に北海道教育委員会（以下、道教委という）が行った、埋蔵文化財包蔵地一般分布調査でも確認された。さらに昭和56年4月の縦貫道等分布調査で追認された。今回の調査範囲は、縦貫自動車道のうち登別市から室蘭市へ抜けるトンネル入口部分にあたり、工事計画の変更が不可能であることから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。なお、今回調査した範囲は、登別市富岸町58の3・標高47～62mの地点で、遺跡全体の広がりうち、北半部分に当たっている。

調査は、まず昭和60年6月3日～6月8日、道教委文化課の指導のもとに、北海道埋蔵文化財センターによる事前発掘調査（試掘調査）が行われ、1,300㎡が包蔵地として把握された。これに基づき、昭和61年6月26日から8月上旬までの発掘調査を行うことになった。ところが、7月下旬に、調査範囲東辺と北辺に、範囲内外にわたる遺構（堅穴・土壇）が確認され、範囲の再確認をせまられた。そこで、8月4日～5日に、再確認調査を実施。道教委文化課・日本道路公団札幌建設局と協議の上、この結果に基づき、調査面積を1,055㎡拡張（合計で2,355㎡）、発掘調査期間を9月5日まで延長し、実施することとなった。（三浦 正人）



この図は国土地理院発行5万分の1地形図「豊別温泉」を複製し、加筆したものである。

図1 遺跡の位置

4. 調査の概要

1) 発掘区の設定

調査の基本図は、北海道縦貫自動車道工事予定図 縮尺 1 : 1,000 平面図を使用した。発掘区の設定は、まず道路予定線内の、海側車線のセンター杭 STA.319 と STA.320 を結ぶ直線を引き、これを Y 軸の 2 ラインとした。STA.320 を $(X : 8 \cdot Y : 2)$ と規定し、ここから 10m ごとに直交するラインを引いて、座標を設定した。X 軸の正は東方、Y 軸の正は北方となる。10×10m の大グリッドは、従って南西角の座標値で呼ぶことになる $((X \cdot Y) = (4 \cdot 3)$ であれば 43 区となる)。さらにこの大グリッドは、南西角を原点として、1×1m の 100 個の小グリッドに分割でき、 $(x \cdot y)$ で表現できる。これも $(x \cdot y) = (6 \cdot 2)$ であれば 62 とし、例えば、大グリッド 43 区の小グリッド 62 区は 43-62 区と表示することにする。遺物の取り上げは、さらに小グリッド南西角を原点として、 $(x' \cdot y')$ の座標値を cm 単位で使用したが、報告書には使用していない。

2) 土層の区分

I 層 表土層。I a 層：I 層のほとんどを占める耕作による攪乱層。黒色腐植土に火山灰や炭化物が混在する。I b 層：I a 層下にある、砂質火山灰層。2 枚の火山灰からなる。

I c 層：シルト質火山灰層。I b・I c 層の火山灰については II 章で詳述する。

II 層 黒色腐植土層。58.5m 以上の高位斜面では、耕作攪乱で I 層と同化している。

III 層 赤黒色腐植土層。II 層・IV 層の黒色土層に入った間層。これについても II 章で述べる。

IV 層 黒色腐植土層。縄文時代早期～後期の遺物包含層。58m 付近の斜面から平坦面への変換点では、50cm 以上の厚さで堆積する。高位斜面を除けば、全体的に厚さ約 12cm で堆積している。比較的、湿気をもった土である。

V 層 暗褐色土層。漸移層で、23区・33区あたりの湧水による湿潤地では、脱色作用によるものか、IV 層との判別が難しい。地山の凹地には、この層の中間か下層に、明黄褐色シルト質降下火山灰が堆積している。この火山灰についても、II 章で述べる。

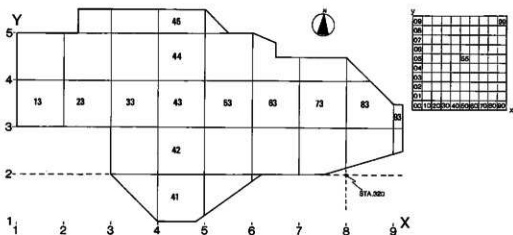


図 2 発掘区設定図

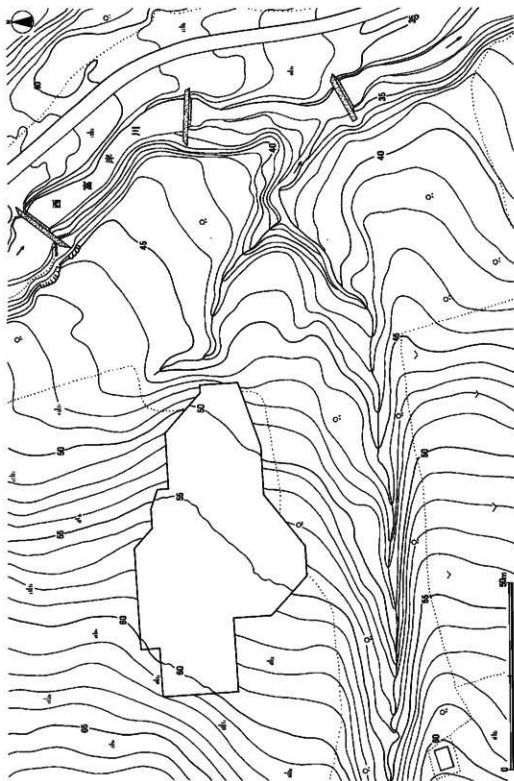


图3 遺跡周辺の地形

Ⅶ層 黄褐色ローム層。31区・32区・41区の古い沢の痕跡には、ソリフラクションによる、角礫の流れがみられる。角礫層になった部分もあり、その下部では、現在でも水が流れている。遺構はすべてこの層にまで掘り込まれている。

3) 調査のあらまし

調査の経緯でも述べたごとく、終了間際に、範囲外への遺構の広がりが確認された。そのため、範囲拡張・期間延長で、調査を完了した。表土は、重機で大半を除去し、人力で完全に掘り終えた。なお、範囲拡張部分は、当初の排土場であったため、この土も重機と人力で除去した。Ⅱ層以下は、10×10mの大グリッド各に、層を追って調査した。当初、遺構のある面と思われた、23区・33区の平坦面は、高位斜面下をもぐった水の湧出地点で、表土除去後は、降雨ごとに、泥田のごとくなり、調査は難渋した。また31区・32区・41区は、この湧水の流れる、古い沢の跡で、ソリフラクションによって大きな角礫が流れ、角礫の堆積した部分では、現在でも下部に水が流れていた。

遺構は、この湧水地と沢を避け、平坦面北東部から中位斜面にかけての南東向きの面に、住居跡6軒・土壇18基・焼土4ヵ所が存在した。なお、範囲北西端の高位斜面には、開拓期の炭焼窯跡があった。

遺物は、湧水地を中心にして、その上方から遺構の位置する面、さらに下方斜面へと流れたように出土している。総点数は、縄文時代中期後半前葉の土器片645点、石器等86点の計731点である。

(三浦 正人)



図4 発掘区の全景 (E→W)

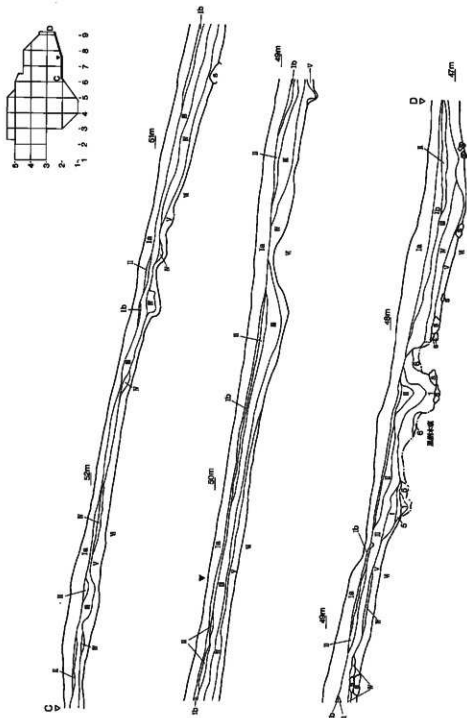


圖 6 土層圖 (C-D)



(この写真は、昭和21年4月撮影の国土地理院
発行の空中写真を複製したものである。)

図7 遺跡周辺の空撮写真



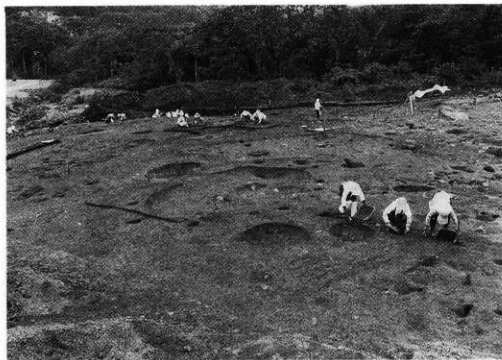
圖 8 調査前風景

(E→W)



圖 9 調査後風景

(E→W)



(中央 H-5 NW→SE)

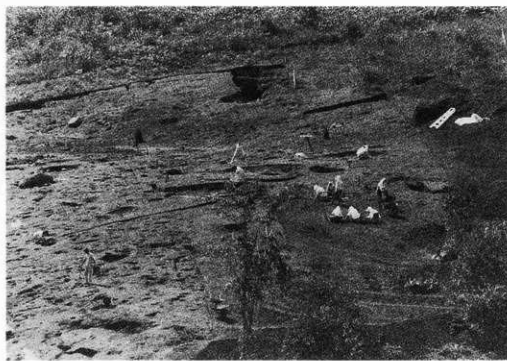


圖10 調查風景 (中央 H-4.6, H-1 E→W)

II 遺跡の位置と環境

1. 位置と環境

今回調査した、亀田公園遺跡は、登別市桃別市街の南西約4.5km、登別市街の北東約3.4kmに位置し、昨年度まで調査した川上B遺跡からは、西南西約2kmの距離にある。カムイヌプリ(標高750.1m)南東山麓の緩斜面(標高20~100m)のうち、西富岸川(「イフ・エカリ・ナイ」(山を廻って行く・沢))(知里・山田 1958)とその支流小河川によって南と北東を区画された、川の右岸、標高46.5m~62mの南東向き斜面にあたる。西富岸川が、亀田記念公園を抜け、この緩斜面部から出ると、その前面には、縄文海道の痕跡とみられる低湿地が広がる。遺跡から低湿地までが約1km、そこから海岸線までは、さらに約1kmの距離がある。地形については、2節で詳述する。西富岸川沿いの遺跡は、北海道教育委員会の登載では、この遺跡のみであるが、範囲はかなり広くとらえられている。また、現地より奥の墓地工事の際や、遺跡対岸の緩斜面からも、遺物を採集した話を耳にした。現地より下流では、我々も、亀田記念公園内で、石斧片や黒曜石剥片を採集している(図1のa)。これらを含め、この緩斜面には、未確認・未登載の遺跡が、まだ多数あるものと思われる。

亀田記念公園は、故亀田光司氏の公園構想により造られた、約31万㎡の自然を生かした庭園型公園で、昭和57年故人の意志により、登別市に寄付されたものである。そのため以前からの地形をよく残している。富岸地区は、明治22年、福岡や佐賀からの屯田兵によって拓かれるまで、トンケシコタンが一時あった他は、未開の地であった。遺跡をのせる緩斜面は、大正15年、旧土地所有者である小林太郎氏が、現地に入植し、牛の飼料のための畑作→牧草地として昭和50年ごろまで、利用してきたもので、調査時点では、雑草地となっていた。畑作は30cmほど土層部を擾乱しており、耕作の際、土器片等が出土しているという。

遺跡のある緩斜面は、①河川に面する斜面②平坦地③標高47~56.5mの斜面④56.5~58mの平坦面⑤58m以上の傾斜面に分けられる。そのうち遺跡は、③~⑤にあり、当報告書では便宜上、③を中位傾斜面、④を平坦面、⑤を高位傾斜面と呼称している。遺跡北東辺には、きわめて緩い尾根が走っている。平坦面は当初、遺構の検出を予想していたが、調査の結果、高位傾斜面を伏流してくる地下水の湧出地点であることがわかった。この湧出地点から南東方へは古い沢が走り、ソリフラクションによる角礫堆積がみられる。遺跡南辺ではこの沢が、東流して西富岸川に合流する現在の沢と平行して走っている。降雨後は、湧出地点は泥田のごとくなり、沢の底には大量に雨水が流れる。しかし、遺構のある北東半部への影響は小さい。

登別市は道内有数の多降雨地域であり、年降水量は2,000mmを超える。特に7~8月は、たびたび集中豪雨が襲って来る。しかし、冬の降雪は少なく温暖、夏は冷涼である(登別市史編纂委員会 1985)。前述のごとく、住居の営まれた面には、雨後もさほど流水がないという地形や、雨流水を利用できる環境と気候のよさが、縄文時代中期後半前葉の集落を、当該地に形成させた要因であろう。

(三浦 正人)



(擴張前 E→W)



圖11 調查風景

(角礫檢出狀況)

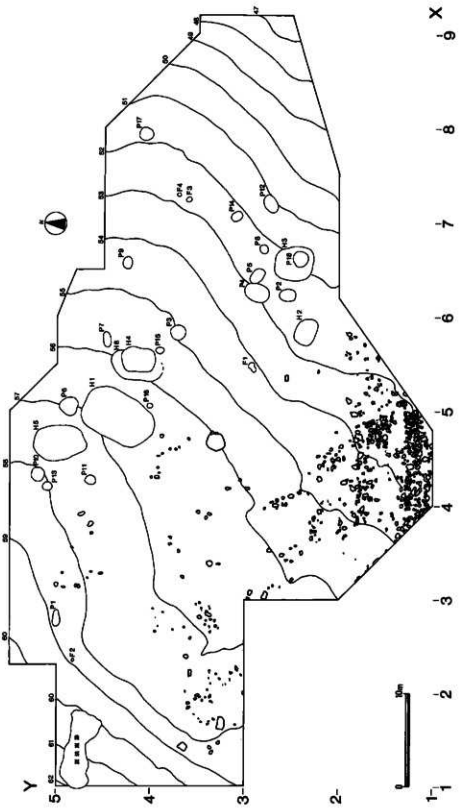


圖12 最終面地形と角礫分布状況

2. 地形

遺跡周辺の地形は、大きく区分すると、山地と平野及びその中間に位置する緩斜面とから成る(図13)。

山地部はカムイヌプリから派生出る山体の一部で、標高約100m以上を占め火山岩類から成っている。標高約150~300mには溶岩流堆積面と考えられる平坦な面が分布している。これ以下の山地部は急斜面から成る。

平野部は沖積低地が大部分を占めるが、富岸川右岸では、沖積低地との比高2.5m±の河成段丘が認められる。

山地部と平野部との中間には、本遺跡が立地する緩斜面が発達しており、富岸川上流から若草町へかけて標高約20~100mに山地急斜面を取り巻くように分布している。この緩斜面の構成物は、安山岩の巨角礫・岩塊とそれらの間を充塞する粘土質シルト-粘土で、非常に分級の悪い層相を示す。巨角礫や岩塊は稜が僅かに磨滅しているが、表面には起伏の小さい凹凸があり、節理面を残しているものも多い。長径は190cm以上に達するものが認められる。このような堆積物の特徴は、通常の流水によるものではなくて、本遺跡の北東約2kmに位置する川上B遺跡で認められたソリフラクション堆積物(花岡・福田, 1983, 北海道埋蔵文化財センター 1985a・1986a)の層相を示すものと考えられる。本遺跡ではこの堆積物の年代を示す資料は得られていないが、おそらく川上B遺跡のものと同時期であろう。現在までに、この緩斜面は小河川によって刻まれているが、谷は狭くて深い。

河成段丘の南には俱多楽火山起源と考えられる軽石流堆積物が分布している。土砂採取のため、この軽石流の堆積面は原形がかなり失われている。(花岡 正光)

3. 完新世の火山灰について

本遺跡では数層の完新世の火山灰が認められる。ここでは、他地域との対比や遺物・遺構の編年の基礎資料とするために火山灰について若干の記載を行う。

(1) 火山灰の産状・層相

現地表面下約30cmまでには、二〜三層の新鮮な火山灰の薄層が認められる。各火山灰層の間には薄い腐植土層を挟む。この例として41区のものについて示す(図14 II-2・4・6)。II-2は暗灰黄色(2.5Y4/2)を呈する砂質降下火山灰で、極粗粒砂大の灰色岩片を多く含んでいる。層厚3cm。II-4は淡黄色を呈する極粗粒砂-細礫大の降下軽石である。層厚2~3cm(最大8

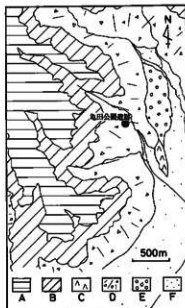


図13 遺跡周辺の地形分類図

凡例 A: 溶岩流堆積面 B: 山地急斜面 C: 軽石流堆積物 D: ソリフラクション堆積物から成る緩斜面 E: 河成段丘面 F: 沖積低地

cm)。II-6 にはよい黄褐色(10YR4/3)を呈するシルト質降下火山灰である。これらの火山灰は遺跡のほぼ全域に発達しており、遺物包含層(IV層)よりも上位にある。

地山をなす巨角礫層堆積面の凹地には、所々にレンズ状に堆積した火山灰が認められる。52区のものについてみれば、明黄褐色(10YR6/8)を呈する、分級の良いシルト質降下火山灰である。この火山灰は、地山の凸部分にはほとんど発達していないので、降下後表面流水等の作用によって再堆積している可能性がある。

本遺跡の黒色腐植土は火山灰を母材とする土壌であるが、ここでは火山灰層としては取り扱っていない。ただし、遺物包含層直上の腐植土(IV層)は他の層準の腐植土と違って赤黒色(2.5YR1.7/1)を呈し、遺跡内で比較的連続性が良く、遺物・遺構の編年を行う際の鍵層となりうる層なので、火山灰として取り扱うことにする。この赤黒色腐植土(粘土質)の層準を図14-I(I-6)に示す。

(2) 火山灰の鉱物組成

火山灰の鉱物組成を調べるために試料を以下の手順で処理し検鏡した。

焼がけ法により泥質分を除去→6% H₂O₂・10% HCl 処理(60℃で湯煎)→水洗・乾燥後篩別→粒径1/4-1/8mmのものについてカナダバルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で500個以上を検鏡→各鉱物の量比を個数%で表わす。

火山ガラスについては、200個以上を検鏡し形態分類を行った。また、一部の火山ガラスについて屈折率を浸液法で測定した。火山ガラスの形態は、粒子全体の形状、気泡の形状と大きさ等によって以下のように分類した。

B型：粒子全体の形状が漿果状。軽石様で微粒の鉱物を含む。

F型：扁平で、気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破碎し、泡壁がridgeをなして直線～曲線状に数本走るもの。

M型：気泡と泡壁がつくる模様が網目状に見えるもの。気泡の大きさはL-C型よりもはるかに小さい。

N型：B型に似るが、粒子周縁部で比較的薄く、針状の気泡・条線が認められるもの。

UT：未分類。上記の型に属さないもの。

各火山灰の鉱物組成上の特徴は次の通りである(図15・16)。

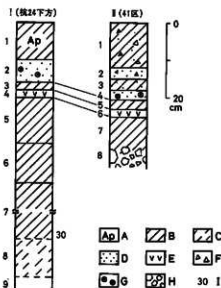


図14 火山灰層位模式図

凡例 A：耕作土 B：黒色腐植土 C：暗褐色腐植土 D：砂質降下火山灰 E：シルト質降下火山灰 F：岩片 G：軽石 H：角礫 I：層準同

Ⅱ-2 主に、斜長石と火山ガラスから成る。斜長石表面にはB型あるいはN型の火山ガラスが附着したものが多く、斜方輝石>不透明(鉄)鉱物>単斜輝石=角閃石である。単斜輝石比(単斜輝石量/全輝石量、以下cPx比)は0.06。スコリアが比較的多く含まれる。火山ガラスはB型・N型が多い。

Ⅱ-4 主に、斜長石と火山ガラスから成る。重鉱物量は少なく、斜方輝石>不透明(鉄)鉱物>単斜輝石。cPx比は0.11。火山ガラスはB型・N型が多い。

Ⅱ-6 主に、斜長石と火山ガラスから成る。重鉱物量は少なく、斜方輝石>単斜輝石=不透明(鉄)鉱物である。cPx比は0.10。スコリアが比較的多く含まれる。火山ガラスはB型・N型・M型が多い。

52区の明黄褐色火山灰 主に、斜長石と火山ガラスから成る。斜長石は新鮮なものが多く、表面をM型火山ガラスが被うものがある。重鉱物量は少なく、斜方輝石>不透明(鉄)鉱物>単斜輝石。cPx比は0.09。火山ガラスはM型が大部分を占める。火山ガラスの屈折率は1.513~1.515である。

Ⅰ-6 比較的重鉱物に富み、火山ガラスは少ない。斜長石は表面が汚れて新鮮なものは少ない。重鉱物量は、斜方輝石>角閃石=不透明(鉄)鉱物>単斜輝石。他の試料と異なって角閃石が含まれ、緑色系が多い。火山ガラスは各型が認められるが、大部分はUTである。

(3) 他地域との対比と年代

上記の火山灰のうち、Ⅱ-2・4・6と52区の明黄褐色火山灰は、本遺跡の北東約2kmに位置する川上B遺跡でも認められている。すなわち、産出層準や鉱物組成から、Ⅱ-2は川上B遺跡のグリッドC-100-cの第5層、Ⅱ-4は同第7層、Ⅱ-6は第9層に対比される。52区の明黄褐色火山灰は、同じグリッドP-2-dの第10層に対比される(北海道埋蔵文化財センター 1985a)。Ⅱ-4・6は両遺跡周辺でも連続性の良い層として認められるが、52区の明黄褐色火山灰は遺跡周辺の露頭ではほとんど認められず、遺跡の発掘によって確認されることが多い(北海道埋蔵文化財センター 1981・1983a・b・1985a・b・1986)。

火山灰の降下年代や噴出源については未詳の部分が多い。横山他(1973)や北海道火山灰命

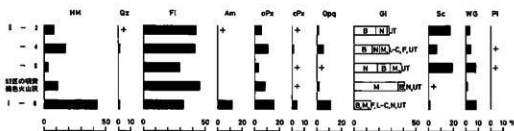
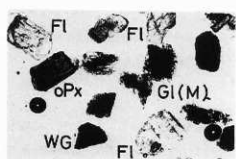


図15 火山灰の鉱物組成

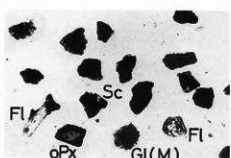
凡例 HM: 重鉱物 Qz: 石英 Fl: 長石(斜長石) Am: 角閃石 oPx: 斜方輝石
cPx: 単斜輝石 Opq: 不透明(鉄)鉱物 Gl: 火山ガラス(B・N等は火山ガラスの型、本文参照。) Sc: スコリア WG: 黒化鉱物粒 Pl: 標物超微粒 +: 1%>



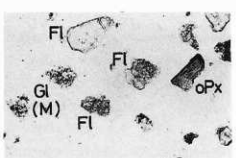
I-2 x54



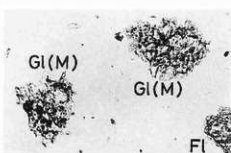
I-4 x54



I-6 x54



52区の明黄褐色火山灰 x54



52区の明黄褐色火山灰 x85



I-6 x54

図16 火山灰の顕微鏡写真

凡例 Fl: 斜長石 Am: 角閃石 oPx: 斜方輝石
 cPx: 单斜輝石 Opq: 不透明(鉄)鉱物
 GI: 火山ガラス (M-Nは火山ガラスの型、本文参照)
 Sc: スコリア WG: 風化産物粒
 (すべて下方ボーラーだけ)

名委員会(1982)の記載・火山灰分布図から判断すると、Ⅱ-2は有珠山IVa火山灰(Us-IVa)、Ⅱ-6は有珠山b₂火山灰(Us-b₂)の可能性が高いが、未だ十分な追跡調査はなされていない。Ⅱ-4は分級の良い火山灰なので、比較的遠方の火山に由来する可能性がある(北海道埋蔵文化財センター 1985a)。これらの火山灰は、遺物包含層との関係から縄文時代中期後半よりもはるかに新しい。

Ⅱ-6は赤色味があることで他の腐植土と区別されるが、他地域との関係や噴出源については不明である。本火山灰は、遺物包含層の直上にあることから縄文時代中期後半以降の降下物である。

52区の明黄褐色火山灰は、遺物や遺構との関係から、川上B遺跡では縄文時代早期以降同中期以前、一方、虎杖浜3遺跡では縄文時代早期の降下物であることが確認されている(北海道埋蔵文化財センター 1983a・c)。したがって、降下年代は縄文時代早期とみなすことができる。本火山灰の噴出源は不明であるが、分級が良いことから比較的遠方に起源をもつものであろう(北海道埋蔵文化財センター 1985a)。

(4) まとめ

完新世の火山灰として五層を認めた。これらのうち、考古学上重要な火山灰は52区の明黄褐色火山灰とⅡ-6である。前者は堆積の場所によって黄・黄橙・橙・赤橙色を呈するシルト質の降下火山灰である。斜長石とM型火山ガラスに富み、火山ガラスの屈折率は1.513~1.515である。縄文時代早期の鍵層として有効である。後者は土壌化が進んでいるが、赤黒色を呈することで他の層準の腐植土と区別される。また角閃石も比較的多く含まれる。縄文時代中期後半前後の鍵層として有効であろう。

(花岡 正光)

III 遺構と遺物

1. 概要

遺跡の立地する南東向き緩斜面は、I・II章でも述べた如く、西富岸川とそこに西から流入する、小沢によって区画される。標高42~47mにつづく平坦地には、遺跡は確認されなかったが、それより上位の中位傾斜面→平坦面→高位傾斜面には、遺構・遺物が検出された。

遺構は、ソリフラクションによる角礫堆積や、中央平坦面の湧水地とその流出する沢を避けるように、遺跡の北東半に集中している。平坦面と中位傾斜面に位置するものに分けられるが、時間的差を表すものではない。住居跡6軒・土壇18基・焼土4ヵ所を検出した。土壇・焼土は、特定の付属関係や、時期を認定できるものはないが、住居に關係するもので、全体として集落を形成するものである。H-4と6、H-3とP-18、P-4と5の切り合い關係から少なくとも、2つの時期に形成されていたものと考えられる。IV層中から掘り込みのある土壇もあることから、さらに時期の延長も考えられるが、いずれにしても、そう時間差のあるものではない。住居跡の平面形は、長方形から多角形的な形態をみせ、床面に石囲い炉はない。東北東約2kmにあり、昨年度まで調査された川上B遺跡では、石囲い炉のある住居跡が多数検出され、その最古段階は縄文時代中期後半後葉であった。平面形が縄文時代中期の様相を呈することや、石囲い炉の有無を考慮すれば、当遺跡の集落は、縄文時代中期後半前葉以前のものである可能性が高い。火山灰から見ると、川上B遺跡で縄文早期の住居跡の覆土としてあった黄褐色シルト質火山灰は、当遺跡では、地山の凹地にみられるだけである。当遺跡の住居跡の上層の覆土としてある赤黒色腐植土(III層)は、西南西2.2kmにある室蘭市水元遺跡(縄文時代中期~後期)周辺の露頭でも観察できる。この層は、水元遺跡で遺物包含層とする黒褐色土層の中間部に堆積している。以上、住居跡・火山灰の面からは、当遺跡の集落の形成された時期を、縄文時代前期~中期末と想定できる。

遺物は、遺構の位置する範囲の他、湧水部やその流れ沢にもみられるが、ほとんどが原位置を保たないものと思われる。土器片や石英・黒曜石原石にみられる摩耗は、移動や流水によるものであろう。総点数は731点で、内訳は、土器片645点、石器39点、剃片・原石39点、礫・その他8点である。遺構数を考慮すれば、少ない点数であり、これは斜面下方への流出や、継続使用個体の人為的移動が、その原因であろう。石器には、No21のつまみ付ナイフ等のように縄文時代早~前期の様相を呈するものや、No14の石鏃のごとく縄文時代後期のものと思われるものがある。しかし、土器やその他の石器は、概ね、縄文時代中期の様相を示し、特に土器は、縄文時代中期後半前葉(大安にB式・柏木川式に対応)に位置付けられるものである。

遺構・遺物・火山灰から総合的に判断すれば、当遺跡の中心的時期は、縄文時代中期後半前葉に規定できよう。

なお、高位傾斜面に当地開拓期(明治22年以降)の炭焼窯を検出したので、合わせてこれも報告する。

(三浦 正人)

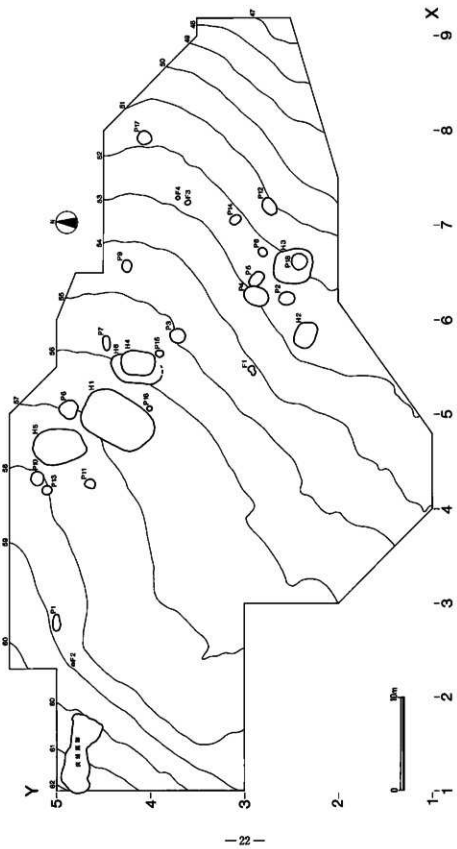


图17 地形位置图

2. 住居跡

H-1 (43-79-89-99, 44-60-64-70-76-80-87-90-97, 54-00-07-11-16-23-26区)

規模 7.77×4.90×0.35m

平面形 縦長台形(長方形)

面積 29.9㎡(有効面積 約28㎡), 6軒中最大

特徴 南東向き平坦面の東端、きわめてゆるい尾根際に、長軸をNE-SWに向けて位置する。標高56.5~57mの平坦面に、傾斜方向と長軸をほぼ平行にしてつくられている。北にH-5・P-6, 東にH-4・6・P-7が位置する。南コーナー付近にP-16が接するようにある。

床面は、VI層に張り込まれており、ほぼ平坦だが、礫の露出している部分がある。壁は、傾斜下方にあたる東~南側は小さくゆるい立ち上がり、南西は確認できないほどになっているが、北~西壁は、高く鋭い立ち上がりを見せる。床や北西壁は、固くしまっている。

床面には、北西壁側に2カ所の浅いピットがある。そのうち南のものは、長軸を竪穴壁と直交するように向け、北側のピットは、長軸が、竪穴壁と平行する。後者にはさらに中央に一段低い小ピットがあり、西側に柱穴No20が位置する。また南コーナー付近に、きわめて浅いくぼみがあり、これには柱穴No16と17が、両端に掘られている。

炉は、長軸ライン上に2カ所ある。北側を炉-1, 南側を炉-2とする。いずれも石囲い等の痕跡はない。炉-1は、径85cmほどの円形で、焼土層の厚さは14cm, 下層ロームにも熱変化を与えている使い込まれた炉である。炉-2は、60×55cmの方形で、厚さ5cmだが、やはり下層ロームに熱変化を与えており、使い込まれた炉といえよう。炉-2焼土中から、黒曜石の微細片2点を検出している。なお、図の上方にあるうすいスクリントーンは、覆土中に流れ込んだ焼土である。

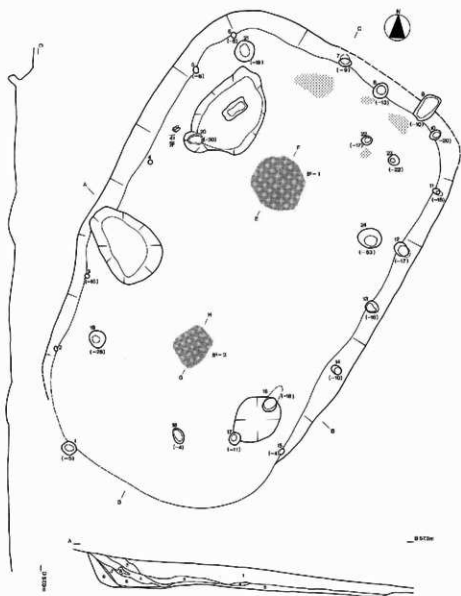
柱穴は、全体で24本確認した。No1~15は壁柱穴で、ほとんどが内傾斜しているが、深さは最深でも20cmと浅い。No17-19-20-21-23-24の6本は主柱穴で、特にNo24は大型で、掘り込みも53cmと深い。壁柱穴・主柱穴とも、ほぼ対称に配置されている。その他のNo16-18-22は補助柱穴と思われるが、No16は極端な傾斜をもっており、柱穴ではない可能性もある。柱穴や壁のあり方、ピットの配置からみて、南コーナーか東コーナーのいずれかに、入口構造があったのであろう。

覆土は5-8層のような壁際のローム崩落や、IV層に対応するI層など、すべて自然堆積によるものである。柱穴の埋土は、濁黄褐色土(9層)が主体である。

遺物 土器3点が覆土から出土。うち2点(図47-1-2)を後に掲載した。石器は、図51-26-28の小型磨製石斧が、柱穴No20と壁の中間の床面から出土した。26を下にして、3本が重なり合う格好で、刃先を南西に向けている。また南コーナー外に、台石(図52-33)が使用面を裏にして出土した。図50-17-20の石槍先は、西コーナー外1mの地点で、突き刺さるような状況で4本まとまって出土したものである。図51-35の扁平礫は、柱穴No16付近の床面にあったものである。

時期 床面出土の土器はないが、周囲の状況から縄文時代中期後半前葉の所産だろう。

(三浦 正人)



断面1
0.5m

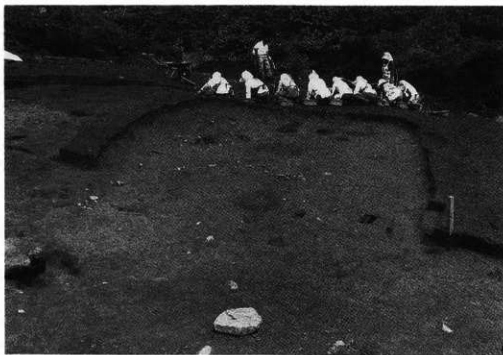
1. ブロック状の粘土 (褐色土)
2. 粘土質土
3. 褐色土
4. ロームの熱変化 (褐色土・炭化物)

断面2
0.5m

1. 褐色土
2. 粘土質土
3. ロームの熱変化

1. 褐色土
2. 褐色土 (ローム)
3. 褐色土 (ローム)
4. 褐色土 (褐色土・黄褐色土)
5. ロームブロック
6. 褐色土 (炭化物)
7. 褐色土
8. 褐色土 (炭化物)
9. 褐色土

図18 H-1 (1)



完 掘



北西壁際セクション



床面の石并出土状況



伊-1 セクション



H-1 層の石器出土状況

図19 H-1 (2)

H-2 (52-63-72-74-82-84-92-94区)

規模 2.80×2.22×0.28m 平面形 隅丸長方形

面積 4.6㎡ 6軒中最小

特徴 南東へ向かって傾斜する中位斜面の南側、標高52.5～53mの間に位置する。今回確認した住居跡の中では最も南側にある。本住居跡の西側には遺構はなく、東側にP-2・4・5とH-3が所在する。

本住居跡は、今回調査した住居跡の中で最も小さなものである。形は他のものと同様に隅丸長方形を呈しているが、長軸がほぼ東西方向になっており、北西上方に位置するH-1・4～6（長軸はほぼ南北方向）とは異なっている点が注目される。

床面は、VI層に掘り込まれており、ほぼ平坦である。中央部分に浅い掘り込みが見られ、VI層の土を貼っている。この部分はかなり踏み固められており、上面が床面と平坦になっている。

付属ピットは、この貼り床を挟んで東西に一つずつが確認された。西側のピットは、壙口部の直径が25cm内外のほぼ円形を呈し、深さは5～6cmで、一部がやや凹んでいる。東側のピットは、壙口部が12×9cmの楕円形で、深さは5cmである。いずれも覆土は4層の土で、本住居跡の埋没時に流れ込んだ土と思われる。柱穴は、内外いずれにも確認されておらず、炉跡もない。

遺物 土器片15点、石鏃1点、鏝3点が出土している。このうち床面から出土したものは、土器片が9点あるのみで、これらも細片がほとんどであり、図示できたのは図47-3～5の3点にすぎない。

時期 縄文時代中期後半前葉

(田才 雅彦)



図20 H-2 (1)

1. 灰白色火山灰
- 1'. 灰黄色凝結火山灰
2. 灰白色シルト質火山灰
3. 黒色土 (ローム粘土)
4. 暗褐色土 (ローム粘土)
5. 暗褐色土
6. 黄褐色土 (ロームに黒褐色土混)
- 6'. 黄褐色土

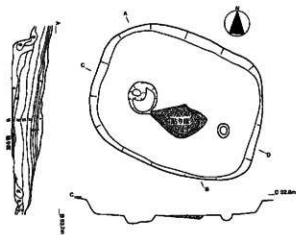


図21 H-2 (2)

H-3 (62-33-35-42-46-52-56-62-66-72-76区)

規模 4.50×4.14×0.42m

平面形 隅丸正方形

面積 10.2m²

特徴 H-2の東側、ほぼ標高52mの高さに位置する。約4mの間隔をもって隣接するH-2よりも若干低く、今回調査した住居跡の中でも最下位にある。本竪穴の北及び西側に、P-2・4・5・8が並んでいる。

本住居跡は、他の住居跡の平面プランが全て概略隅丸長方形を呈するのに対し、正方形に近い平面プランをもっている。

床面は、VI層に掘り込まれており、ほぼ平坦である。壁面は、西側部分においては明確な立ち上がりを見せるが、東側部分において確認できたのは床面から2~3cmに過ぎない。

柱穴は、住居跡内部に1本、外側に7本を確認した。開口部の直径は、いずれも10cm内外であるが、住居跡内のものは、平面形が長方形に近く、深さ35cmをはかる。外柱穴は全て円形を呈し、深さは10~23cmである。

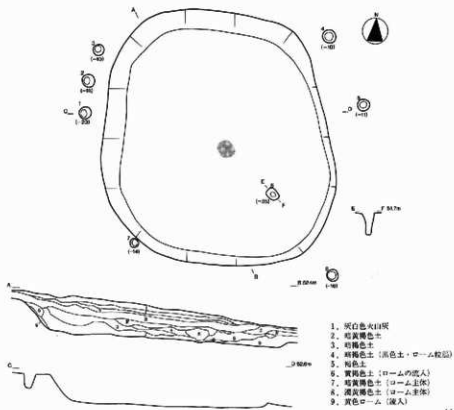
床面のほぼ中央に、15×12cmの焼土が見られた。厚さは、最も厚い部分で3cmである。石囲い等の痕跡はない。

なお、本住居跡はP-18と重複している。両者の関係は、P-18が古く、本住居跡が新しい。P-18が埋まりきらないうちに本住居跡が構築されたようで、P-18の覆土1・2層は、その際に入れられたものと思われる。この部分は固く締まっており、その上に、前述した柱穴及び焼土が所在する。

遺物 土器片39点が出土している。11点を図示した(図47-6~16)が、39点中床面から出土したものは1点(6)のみであった。

時期 縄文時代中期後半前葉

(田才 雅彦)



H-3



图22 H-3

H-4 (53-49-59-69, 54-40-43-50-53-60-63区)

規模 3.31×2.70×0.44m 平面形 長五角形

面積 7.3㎡

H-6 (53-38-39-48-49-58-59-69, 54-30-33-40-44-50-54-60-63区)

規模 (5.50)×(3.30)×0.52m 平面形 長多角形

面積 12.6㎡

特徴 (H-4・6) 切り合い関係をもつ2つの住居跡である。その前後関係は、H-6が古く、H-4が新しい。

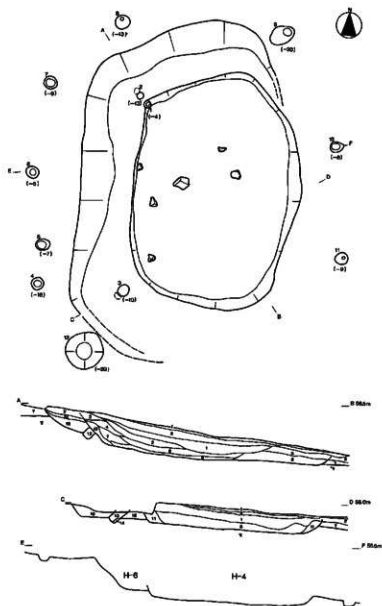
H-4・6は、標高56mほどのゆるやかな尾根際の傾斜が若干きつくなる南東斜面に位置し、H-1から南東に1mほどの距離をおいている。長軸方向はほぼN-Sであり、H-1のそれに比べて北側へ偏っている。H-4・6の北東には長楕円形のピットP-7があり、南東には傾斜に沿って円形のピットP-15・3がある。

H-4は、H-6より規模で一回り小さいが、ほとんど重なり合っているため、H-6の大部分を切っている。床面はVI層に掘り込まれており、H-6の床面より深い位置にある。平坦であるが、斜面に沿ってゆるやかに傾斜している。また、VI層中の礫の露出がみられる。壁は北側・西側がH-6の床面とのわずかな段差としてとらえられたにすぎず、斜面下方側(東側・南側)にゆるやかな立ち上がりを見せる。H-4の柱穴と考えられる小ピットはNo.1~3であり、北西隅の1は深さ4cmと極めて浅い。2・3は、設定したセクションベルトにおいて確認したもので、壁を斜めに掘り込んでつくられている柱穴である。この中につまる土は、しまりのない軟いものである。覆土は、黒色土系統(1・2・5・6層)が主体を占める自然堆積のものと考えられる。炉その他の施設はない。

H-6は、大部分がH-4に壊されているため全体像は知り得ない。床面は、北側・西側の一部分が残っているにすぎないが、壁にむかってゆるやかに上がっている。H-4の床面と同様、斜面に沿って傾斜する状況もとらえられた。壁の立ち上がりは、斜面上位の北側・西側で明確にみられるが、斜面下位の南側では明確には把握されなかった。東壁はH-4によって壊されている。柱穴は、住居跡の外側をめぐる9個の小ピットが考えられる。最も深いものは、20cmのNo.9・12で、他は10cm未満のものが多く、また、南西側の斜面下方にあるNo.12は、径が60cmと大きいものであり、南東側にあるP-15も柱穴と考えたほうが良いかもしれない。覆土は、北側・西側に残っており、16層のごとく、黄褐色ローム質土が主体である。床面付近で部分的に炭化物粒がわずかに認められた。この黄褐色ローム質土は、斜面上方にあるH-1の掘り上げ土の可能性もある。

遺物 H-4の覆土中より、4点の土器片が出土している(図47-17-20)。北東隅および西壁近くからで、流れ込みによるものと考えられる。H-6出土の遺物はない。

(田中 哲郎)



- | | |
|---|--|
| <p>H-4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒色土 2. 黄褐色土 (ローム粒混) 3. 赤褐色土 (厚層の泥入) 4. 赤褐色土 (厚層の泥入、ローム粒混) 5. 黒色土 (ローム粒混) 6. 暗茶褐色土 7. 暗黄褐色土 (黒色土粒混) 8. 暗黄褐色土 (黒色土+ローム・しまり入り) 9. 暗黄褐色土 (黒色土+ローム・しまり入り) 10. 黄褐色土 (ローム泥入) 11. 黄褐色土 (ローム泥入・黒色土粒混) 12. 黄褐色土 (しまり入り) 13. 黄褐色土 (しまりなし) 14. 暗黄褐色土 (しまりなし) | <p>H-6</p> <ol style="list-style-type: none"> 15. 暗黄褐色土 16. 黄褐色土 |
|---|--|

図23 H-4・6 (1)

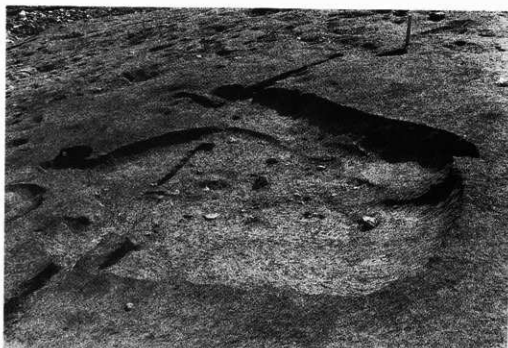


図24 H-4・6(2)

H-5 (44-48・49・56-59・66-69・77-79・87-89, 45-40・41・50-52・60-62・72・80・81区)
 規模 5.37×3.83×0.29m 平面形 長五角形(卵形)

面積 15.1㎡(有効面積 約13㎡)

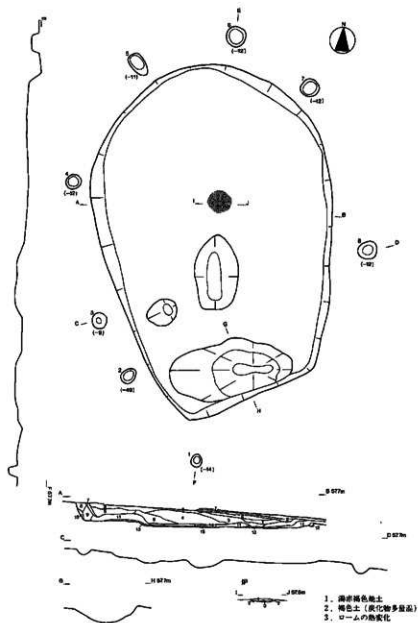
特徴 南東向き平坦面が東向きに変換する、きわめて緩い尾根際に、長軸をNWN-SESに向けて位置する。標高57-58mの平坦面に、VI層を掘り込んでつくられている。南にH-1、東にP-6、西側にP-10・11・13がある。

床面は、ほぼ平坦だが、ゆるい傾斜に沿って、北から南、西から東へ若干傾きがある。またセクションラインにも表われているように、北西辺の一部に、小さな段がみられる。壁は、南半の東壁・西壁を除き大体が、顕著な立ち上がりを見せる。床・壁とも、北半部は固くしまりがあがるが、南半には脆い部分がある。

床面には、南端・中央・西寄りと、3ヵ所の長円形ピットがある。後二者は、浅い皿状のくぼみであるが、南端のものは、南壁の大半を占め、深さも25cm以上ある。貯蔵穴と考えることができる。

炉は、竪穴幅の最も広くなる、南寄りの中央部にある。径38cmの円形で、焼土層は7cm。下層のロームが熱変化をうけており、ある程度長く使用されたようである。炉セクション2層に表われているように、炭化物が周囲をとりまくようにあり、木材で囲まれた炉、という可能性を考える必要がある。

柱穴は、竪穴外周に8ヵ所存在する。精査したが、南東部には確認できなかった。No1・2を除けば、左右対称に配置されている。径20-40cm、深さはNo2の49cmを例外として、いずれも10



1. 赤褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 暗黄褐色土 (炭化物層)
4. 黄褐色土 (ローム主体・褐色土層)
5. 暗黄褐色土 (ローム主体)
6. 黄褐色土 (褐色土+ローム)
7. 暗黄褐色土
8. ロームの流入 (褐色土層)
9. 褐色土の流入

10. ロームの流入
11. 黄褐色土 (ローム・黒色土のブロック層)
12. 褐色土+ロームブロック
13. 黄褐色土 (ロームに炭化物層)
14. 黄褐色土 (13に黄土粒混)
15. 砂の層

1. 赤褐色土
2. 褐色土 (炭化物多量混)
3. ロームの熟成化

図25 H-5 (1)

cm前後と浅い掘り込みで、傾斜もみられない。

覆土は、1~3・7~14層が自然堆積と思われる。そのうち8~10層は壁際のロームの崩落である。それに対し、4~6層は、中央部に入るローム主体の土で、人為的に投げ込まれた可能性もある。柱穴の埋土は、褐黄褐色土が主体で、炭化物が一部に混入する。

周辺の土壌は、覆土の状況や位置関係から、特にP-6が関連深いものと思われる。

遺物 土器片5点が、覆土11層から出土している。4点(図47-21-24)の拓影を後に掲載した。床面には、遺物はみられなかった。

時期 土器片の出土した覆土11層は、ほぼ床面直上と考えられる。従ってこの竪穴の造営・使用された時期は、この土器の時期ごろ、縄文時代中期後半前葉と思われる。

(三浦 正人)



完掘(左上P-10・13, 右P-8, 右下H-1)



切セクション

図26 H-5 (2)

3. 土 壕

P-1 (24-79-89, 25-70-80区)

規 模 1.73×(0.80)×0.36m 平面形 長円形

特 徴 ほかの遺構とはやや離れた、遺跡北西側の高位斜面に位置する。長軸は、斜面とはほぼ平行のE-Wを向く。墳底は、おおよそ平坦である。壁は特に斜面側の立ち上がりが急で、傾斜下方の南壁は崩壊している。覆土はすべて自然堆積である。

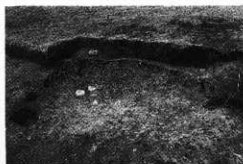
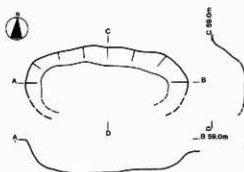


図27 P-1

P-2 (62-14~16-24~26区)

規 模 1.55×1.44×0.36m 平面形 円形

特 徴 H-3の西、H-2の東、P-4の南側に位置する。墳底は平坦である。壁の立ち上がりはゆるいが、東壁に小規模な段をもつ。覆土は自然堆積で、ロームの崩落やIV層対応層もみられる。遺物は、覆土から出土した土器片3点で、そのうち1点(図47-25)を後に掲載した。

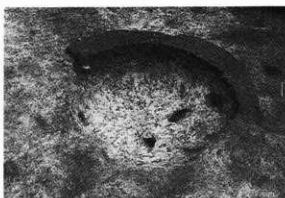
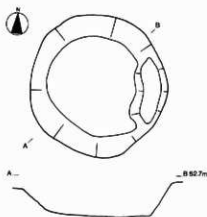
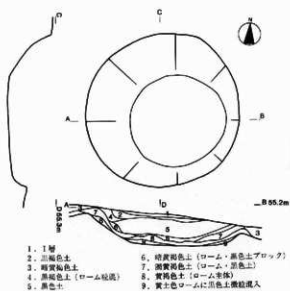


図28 P-2

P-3 (53-76-77-86-87-96-97区)

規 模 1.67×1.53×0.37m 平面形 円形

特 徴 H-4の南東、中位斜面のはじまりあたりに位置する。傾斜に沿って墳底部がやや南東にずれている。その墳底は平坦で、壁の立ち上がりもゆるく、全体に浅皿状を呈する。覆



1. 1層
2. 赤褐色土
3. 黄褐色土
4. 黒褐色土〔ローム状土〕
5. 黒色土
6. 黄褐色土〔ローム・黒色土ブロック〕
7. 黄褐色土〔ローム・赤色土〕
8. 黄褐色土〔ローム主体〕
9. 黄褐色ロームに黒色土塊混入

図29 P-3

土は自然堆積で、ロームの崩落やIV層対応層（5層）がみられる。遺物は図47-26の土器片1点が、覆土から出土している。



P-4 (62-17-19・27-29・37-39区)

規模 2.65×1.98×0.46m

平面形 楕円形

特徴 H-3の北西、H-2の北東に位置し、P-5西縁を切って長軸をほぼN-Sに向けてつくられている。H-2に近い規模をもつが、形状や柱穴の有無から、大型の土壇と判断した。

墳底はほぼ平坦で、その面積は約2.5㎡である。深い掘り込みのため、傾斜下方でも、しっかりとした壁の立ち上がりをもつ。覆土は自然堆積で、ローム崩落やIV層対応層がみられる。遺物は図47-27の土器片1点が覆土から出土している。広さから、仮小屋のような用途も考えられる。

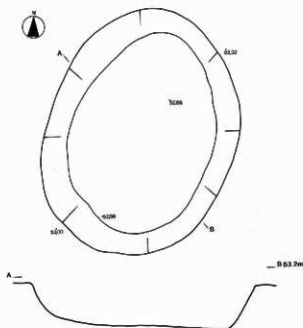


図30 P-4



P-5 (62-38-39-47~49-58区)

規模 1.84×1.24×0.25m

平面形 楕円形

特徴 H-3の北側、長軸をNW-SEに向け、傾斜面とほぼ直角に位置する。西端をP-4構築の際に切られている。墳底は平坦で、壁の立ち上がりもゆるい。覆土は、黒色土(1層)が厚く堆積している。IV層から掘り込まれている。

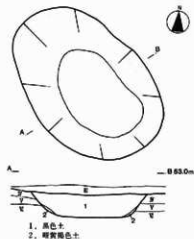


図31 P-5

P-6 (44-97~99, 54-07~09-17~19区)

規模 2.05×1.91×0.41m

平面形 不整形(七角形?)

特徴 H-1の北、H-5の東に隣接して位置する。墳底は平坦である。壁は、墳底付近で急な立ち上がりを見せるが、徐々にゆるい傾斜で開口部へつづく。覆土は自然堆積と思われる

が、黒色土(1層)を除いて、みな固くしまっている。位置や覆土の状況から、H-5と関係する土壌と思われる。

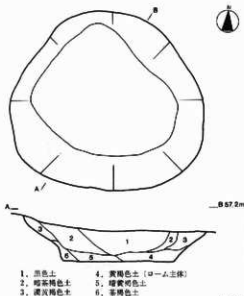


図32 P-6

P-7 (54-64-74-75-84-85区)

規模 1.62×0.95×0.19m

平面形 楕円形

特徴 H-4の北東、中位斜面にはじまるゆるい尾根上に位置する。長軸は、傾斜面とはほぼ直交するE-Wを向いている。墳底はほぼ平坦だが、傾斜にそってゆるやかに傾いている。壁は、墳底から連続するゆるい立ち上がりで、全体に、細長い浅皿状を呈する。覆土は、自然堆積である。

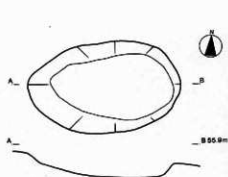


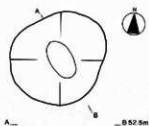
図33 P-7

P-8 (62-67-68-77-78区)

規模 1.07×0.95×0.40m

平面形 不整形

特徴 H-3の北側、中位斜面に位置する小型土墳。全体に碗状を呈する。墳口部は、NE-SW方向にやや長いが、墳底はこれと直交する方向に長い。覆土は自然堆積で、ロームの崩落がみられる。形状・覆土等がP-15と類似している。



1. 黑色土
2. 黄褐色土 (ローム半体)
3. 黄褐色土
4. 褐色土 (V層に黒色土混)

図34 P-8

P-9 (64-51-52-62区)

規模 1.36×1.11×0.39m

平面形 楕円形

特徴 ほかの遺構からやや離れた、中位斜面の尾根の北側に位置する。長軸は、傾斜面に直角のE-Wに向いている。墳底はほぼ平坦で、東側は壁と連続し、傾斜に沿ってゆるやかに立ち上がる。他の壁面は、いずれも急な立ち上がりを見せる。覆土は自然堆積で、ロームの崩落や、IV層対応層の黒色土がある。

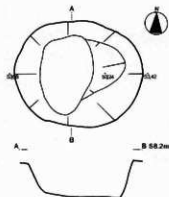


図35 P-9

P-10 (45-21-22-31-32区)

規模 1.40×1.38×0.21m

平面形 円形

特徴 H-5の北西に隣接し、高位傾斜面の終わった平坦面に位置する。墳底は平坦で、壁もゆるやかに立ち上がり、全体として浅皿状を呈する。墳底に径25cmの礎が1個入っていた。IV層からの掘り込みと思われる。

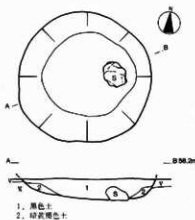


図36 P-10

P-11 (44-25-26-36区)

規模 1.24×0.99×0.26m

平面形 卵形

特徴 H-5の南西、H-5と同レベルの平坦面に位置する。長軸は、SW-NEに向いており、これは、傾斜面とほぼ平行する。墳底は平坦で、壁の立ち上がりは、急な方である。墳底・壁とも、礫の露出している部分がある。覆土は自然堆積で、ロームの崩落がみられる。IV層対応層の黒色土の堆積はうすい。

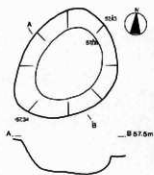


図37 P-11

P-12 (72-16-18-26-28区)

規模 1.98×1.50×0.29m

平面形 卵形

特徴 H-3の東、中位斜面のほぼ中央部に位置する。長軸は、傾斜面に平行する、NE-SWを向いている。墳底は、傾斜に沿って下降するが、ほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上がり、全体として皿状を呈している。覆土は、自然堆積で、P-5や10同様に、黒色土(1層)が厚く堆積している。IV層から掘り込まれており、底の一部は、明黄褐色シルト質火山灰層である。図示していないが、周辺に柱穴様の小ピットが数本認められた。この小ピットと当遺構の関係は不明である。

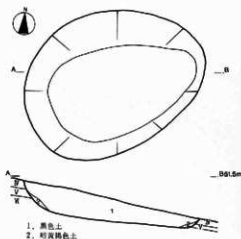


図38 P-12

P-13 (45-10-11-20-21区)

規模 1.10×1.00×0.44m

平面形 不整形円形

特徴 H-5の西、P-10に近接した位置にある。平坦面に、深く掘り込まれた、楕形の小型土壇である。壇内のところどころに礫の露出が見られる。覆土は、自然堆積で、ロームの崩落が認められる。

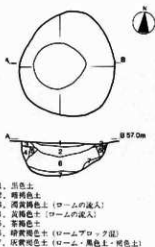


図39 P-13

P-14 (73-00-01-10-11区)

規模 1.23×0.99×0.22m

平面形 楕円形

特徴 H-3の北東、中位斜面のほぼ中央に位置する。長軸は、傾斜面とほぼ直交するNE-SWを向いている。墳底は、ほぼ平坦で、壁の立ち上がりもゆるく、全体的に皿状を呈する。覆土は、自然堆積で、ロームの崩落や、IV層対応層(1層)が認められる。

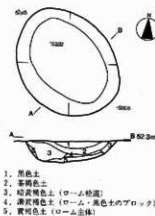


図40 P-14

P-15 (53-68-69区)

規模 0.87×0.78×0.26m

平面形 円形

特徴 H-4の南東に隣接する。H-6の推定範囲の縁辺に位置することから、H-6の柱穴の可能性もある。IV層中から掘り込まれた椀状の小型土壇である。覆土は自然堆積である。形状や覆土の状態が、P-8と類似している。

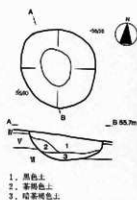


図41 P-15

P-16 (53-09, 54-00区)

規模 0.58×0.55×0.24m

平面形 不整形円形

特徴 H-1の南東に、隣接している。H-1の付属土壇かもしれない。検出された土壇のなかでは最小規模である。壇底は平坦で、壁は、直線のなきつめの傾斜をもって立ち上がる。覆土は、自然堆積と思われるが、H-1以前につくられたものであれば、H-1構築の際に、埋めたものとも考えられる。

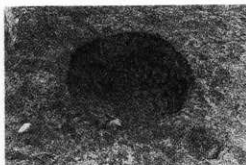
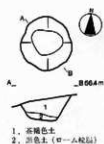


図42 P-16

P-17 (73-89-99, 74-80-81-90-91, 84-00区)

規模 1.54×1.45×0.35m

平面形 円形

特徴 ほかの遺構から離れた、ゆるい尾根の北側、中位斜面の中ほどに位置する。傾斜に沿ったゆるい掘り込みである。壙底は一段低くなり、壁にゆるい段があるような形になる。覆土は自然堆積で、ロームの崩落や、IV層対応層の黒色土がみられる。

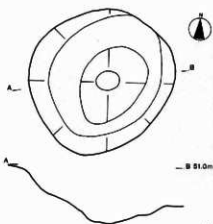


図43 P-17

P-18 (62-33-34-43-44区)

規模 1.82×1.65×0.56m

平面形 円形

特徴 H-3の中におさまる位置にある。深い碗状の土壇で、覆土は、ローム崩落の3層のみが自然堆積と思われる。1・2層は、H-3構築時の土壇埋め土と考えられる。H-3の掘り込みからみて、深さはもう少しあったのだろう。

(三浦 正人)

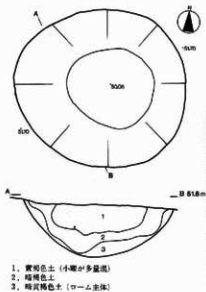


図44 P-18

1. 黄褐色土 (小堀が多量)
2. 暗褐色土
3. 暗灰褐色土 (ローム主体)

4. 焼土

F-1 (52-48-49-59区)

規模 1.10×0.87×0.03m

平面形 不整形

特徴 H-4とH-2の中間、中位傾斜面に位置する。北西上部に風倒木痕の落ち込みがあり、反対側の高まり部分に、この焼土がのっている。層としてとらえられる焼土ではなく、焼土粒の広がる範囲として、認められるものである。斜面上方から流れてきたものか、あるいは風倒木痕に関わる焼土と考えられよう。

F-2 (24-38区)

規模 0.70×0.46×0.07m

平面形 楕円形

特徴 P-1の西側、高位傾斜面の終結部に位置する。斜面上方から流れてきた様子はなく、原位置と思われる。淡褐色焼土がV層にうすく一面に広がっており、周辺で熱変化や炭化物は確認できないことから、一時的に、火を焚いた場所と推定されよう。

F-3 (73-25-26区)

規模 0.54×0.46×0.08m

平面形 円形

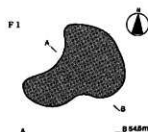
F-4 (73-26-27-36-37区)

規模 0.36×0.35×0.07m

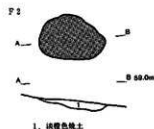
平面形 円形

特徴 (F-3・4) 中位傾斜面のほぼ中央に、他の遺構とは独立した形で、2カ所の焼土が並んでいる。両者ともV層上面にある。ともに、層をなす焼土の範囲・厚さはさらに小規模で、周囲の土壤に顕著な熱変化も与えていないことから、一時的に使用した屋外炉と、考えられる。

(三浦 正人)



1. 焼土粒主体の暗褐色土
2. 焼土粒の混入した褐色土



1. 淡褐色焼土



1. 焼土粒の混入した暗褐色土
2. 暗褐色焼土
3. 深黄褐色土



1. 暗黄褐色焼土
2. 焼土粒の混入した褐色土

図45 F-1～4

5 遺物

1) 土器 (図46-49)

今回の調査で出土した土器は、すべて縄文時代中期後半に属するものである。これは、当センターがこれまで登別地区で調査した川上B遺跡・千歳5遺跡等というⅡ群土器に属し、b-2類(柏木川式及び大安在B式に相当)と細分されるものに含まれる。

これらは、胎土の相違によって以下の3種に分けられる。尚、図示番号は写真のそれと同一である。

a種 (1・3・4・6-15・17-19・22・23・25・28-58)

胎土に多くの砂粒を含むもの。器質は脆く、器表面の磨耗の激しいものが多い。

b種 (5・24・26・59-65)

胎土に繊維を含み、焼成はかなり良く堅緻である。色調は、内部が黒色で、内外表面が黄白色となるものが多い。また他種に比べ重量感がなく、かなり軽く感じられる。

c種 (2・16・20・21・27・66-83)

胎土に砂粒をほとんど含まない緻密なもの。焼成はかなり良く堅緻である。

これらの全体に占める割合は、a種が76%と全体の4分の3ほどを占め、量的に一番多い。

b種は9%、c種は15%である。

これらの土器のもつ文様には、a-c種を通じて、縄線文がみられる(21・24・29・30・41・59・60)ほか、口唇上に刺突をもつもの(25・28・30-32・66・67)がある。前者の中には、口縁部に横環させる単純なものほかに、馬蹄形丘直文や円形貼付文をもつH-5出土の24や、粘土紐の貼付による隆帯上に縄線文を施す29がある。地文は単節の斜行縄文がほとんどで、縄線文(8・9・43・44)が若干みられる。また、縄文をもつ41には、結束第1種の縄文がみられ、胎土からみて29と同一個体かもしれない。このほか、硬い繊維質のものを擦った原体を回転もしくは押圧したかと思われる28があるが、原体に用いる素材等詳細は不明である。

これらの類例には、室蘭市水元遺跡(松谷 1986)の4類土器の一部、7・10類土器や、川上B遺跡A地区(森 1985)出土土器がある。今回の亀田公園遺跡例は、住居跡に石組炉を持たないことや、遺物量の稀薄さからみて、後者により近い様相をもっていると思われる。

(田中 哲郎)

名 称	数 量	名 称	数 量	名 称	数 量
土 器	645(71)	石 器 類	88(11)	石 斧	6(3)
分 類 a	476(59)	石 鏃	16(1)	たたき石片	2
" b	61(4)	石 槌	6	すり石	1
" c	95(8)	つまみ付ナイフ	2	台石・石皿	3(1)
不 明	13	スクレイパー	3	黒曜石原石	4
		フレイク;チップ	35(2)	礫	8(4)

表1 出土遺物一覧

※()は遺構内出土点数

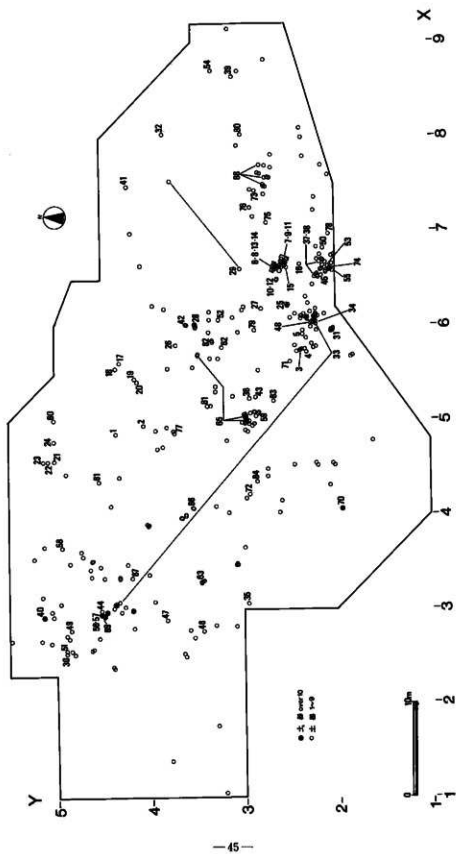
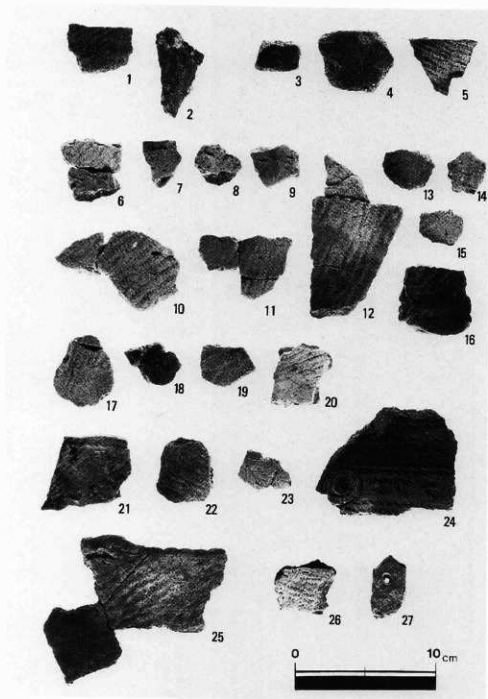


图46 土壤出士位置图



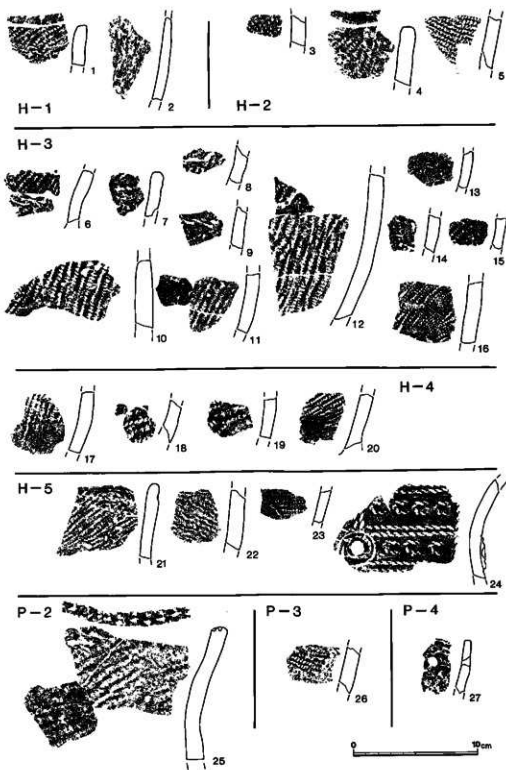
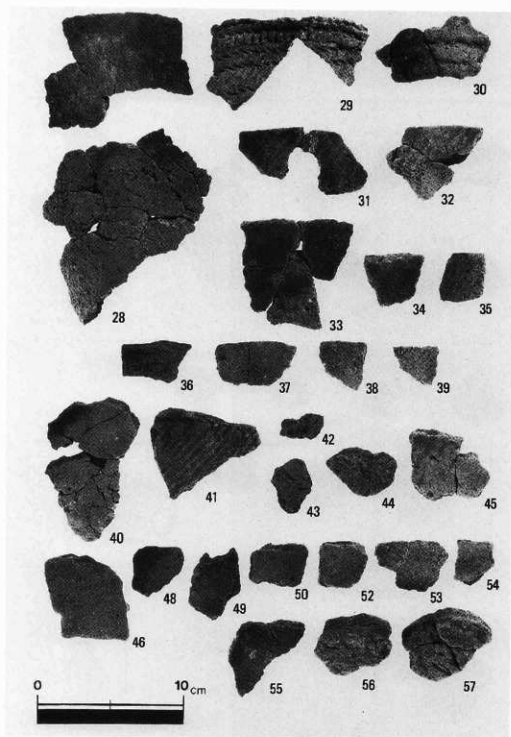


図47 遺構出土の土器



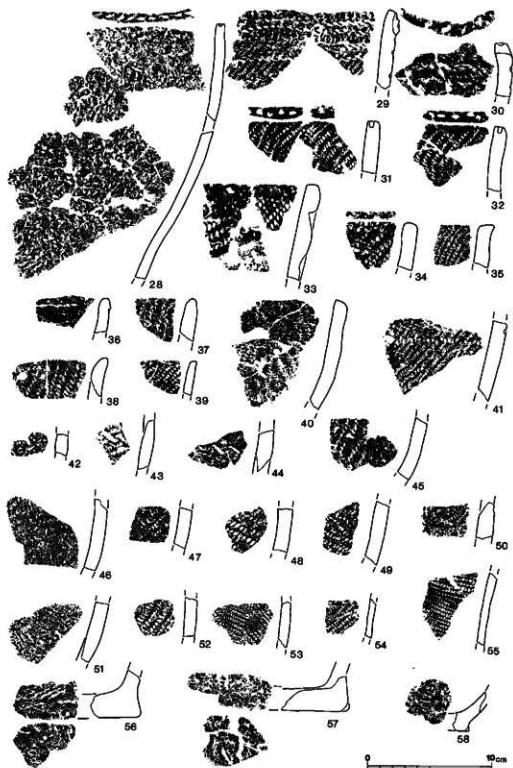
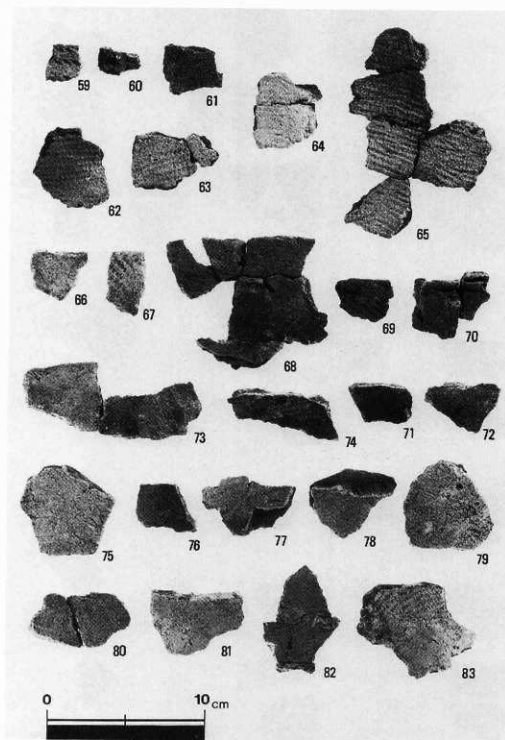


図46 包食層出土の土器 (1)



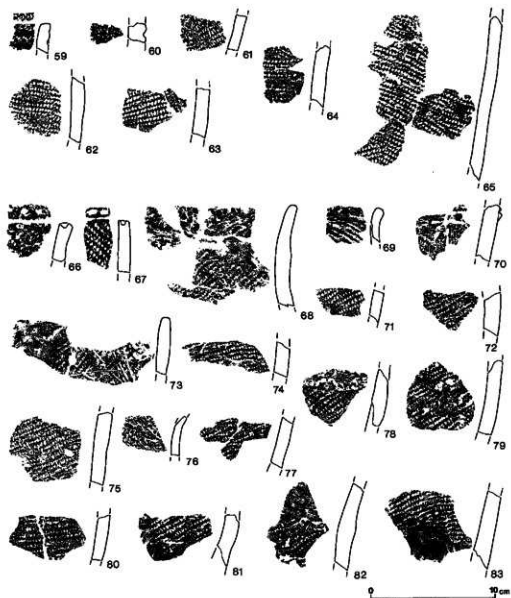


図48 包倉層出土の土器(2)

No	遺構名	層位	発掘区	部位	分類	No	遺構名	層位	発掘区	部位	分類
1	H-1	覆土	44-83	口縁	a	5	H-2	覆土6	52-93	胴部	b
2	"	"	44-90	胴部	c	6	H-3	床直	62-66	"	a
3	H-2	床直	52-73	"	a	7	"	覆土	62-65	口縁	"
4	"	覆土	"	口縁	"	8	"	"	"	胴部	"

表2 遺構出土縄紋土器一覽(1)

No	遺構名	層位	発掘区	部位	分類	No	遺構名	層位	発掘区	部位	分類
9	H - 3	覆土	62-65	胴部	a	19	H - 4	覆土	54-41	胴部	a
10	"	"	62-56	"	"	20	"	"	"	"	c
11	"	"	62-65	"	"	21	H - 5	"	45-50	口縁	c
12	"	"	62-46	"	"	22	"	"	"	胴部	a
13	"	"	62-66	"	"	23	"	"	45-51	"	"
14	"	"	"	"	"	24	"	"	45-70	"	b
15	"	"	62-65	"	"	25	P - 2	"	62-25	口縁	a
16	"	"	62-63	"	c	26	P - 3	"	53-77	胴部	b
17	H - 4	"	54-63	"	a	27	P - 4	"	62-17	口縁	c
18	"	"	54-53	"	"						

表3 遺構出土掲載土器一覽(2)

No	発掘区	層位	部位	分類	No	発掘区	層位	部位	分類	No	発掘区	層位	部位	分類
28	63-04	IV	口縁	a	47	23-88	IV	胴部	a	66	43-05	IV	口縁	c
29	73-57 63-00	"	"	"	48	62-02	"	"	"	67	34-31	"	"	"
30	24-58	"	"	"	49	24-78	"	"	"	68	72-47-56-67	"	"	"
31	52-90	"	"	"	50	62-81	"	"	"	69	24-95	"	"	"
32	83-80	"	"	"	51	24-58	"	"	"	70	41-09-19	(C調)	胴部	"
33	62-01	"	"	"	52	63-02	"	"	"	71	52-64	IV	"	"
34	62-02	"	"	"	53	62-60	"	"	"	72	42-29	"	"	"
35	32-09-19	(C調)	"	"	54	83-62	"	"	"	73	72-48	"	口縁	"
36	52-29	IV	"	"	55	62-50	"	"	"	74	62-60	"	胴部	"
37	62-51	"	"	"	56	24-95	"	底部	"	75	72-07	"	"	"
38	62-52-61	"	"	"	57	24-95	"	"	"	76	70-28	"	"	"
39	83-60	"	"	"	58	34-57	"	"	"	77	43-87	"	"	"
40	25-91	"	"	"	59	52-08	"	口縁	b	78	62-90	"	"	"
41	74-42	"	胴部	"	60	55-00	"	胴部	"	79	52-98	"	"	"
42	63-05	"	"	"	61	44-35	"	"	"	80	82-09	"	"	"
43	52-28	"	"	"	62	53-72	"	"	"	81	53-13	"	"	"
44	24-95	"	"	"	63	33-24	"	"	"	82	53-83	"	"	"
45	62-51	"	"	"	64	42-38	"	"	"	83	52-26	"	"	"
46	23-74	"	"	"	65	42-99	"	"	"					

表4 包含層出土掲載土器一覽

2) 石器等 (図50-53)

今回の調査で出土した石器の種類と点数は、表-1に示したとおりである。一括出土の17-20やH-1床面直上で重なり合って出土した石斧26-28以外は、すべて調査区域全体に点在して出土している。

石鏃 (1-14) 平基の無茎鏃 (1-5)、凹基の無茎鏃 (6-8)、有茎鏃 (4-14) の3種に大別される。平基の無茎鏃のうち、1・2は三角形を呈するもの。3・4は五角形を呈するもので、特に4は先端部と基部との間に段差をもっている。凹基の無茎鏃では、8の片面に主刺断面を残していることや、挟りの大きさが目立つ。有茎鏃はすべて凸基のものであるが、9はさほど明瞭な茎をもっていない。

これら石鏃の重さは、1.0-2.0g前後のものであり、最大重量のものは11の3.0gである。

図示したもののほかに、欠損品で先端部・基部のみのものがそれぞれ1点ずつある。

石槍・石鋸もしくは両面加工のナイフ (15-20) 明瞭な茎をもつもの (15・16・18) とそうでないものに分けられる。17-20は一括出土のものであるが、前者の形態を含め各々違った形態を示す。特に19は、先端部の側縁が各々凸と凹で左右対象となっておらず、ナイフの機能を強くもっているものかもしれない。

これらの重さはすべて3.0gを超え、最大は20の12.4g、最小は17の3.4gである。

つまみ付ナイフ (21・22) 21は縦長剥片、22は横長剥片を素材とする縦長のものである。背面の調整は全面に及び、腹面のそれはつまみ部・刃部に止まる。石質は共に珪質頁岩。

スクレイパー (23-25) これらは、剥片の一側縁に直線的な刃部をもつものである。24には直線的な刃部のほか、内湾する刃部をもっている。23・25は黒曜石製、24は頁岩製である。

石斧 (26-31) 前述のとおり、26-28はH-1出土のものである。すべて円刃で、27には使用による刃部の片減りか顕著にみられる。材質は緑色泥岩 (26・27)・黒色片岩 (28)。他の29-31はすべて平刃。材質が珪岩 (29)・珪質凝灰岩 (30・31) で、26-28と全く違っている。

すり石 (32) 1点のみの出土である。安山岩の円形扁平礫を素材としている。縁辺に2つのすり面をもつ。

台石 (33・34) ともに安山岩製のものである。H-1の西脇から出土した33は、図示した面に2ヵ所の敲打痕とみられる凹みがある。34は、昭和60年度のC調査で出土した円形扁平礫を素材とするものである。

これらの石器のほか、黒曜石の原石4点が出土している。93.4gもある1点の他は、3.7-7.9gの小さいもので、多孔質の非常に脆いものである。これらを素材とした石器は出土していない。同じく、川上B遺跡でも同様の原石を出土しているものの、石器製作に使用されていない。⁽²⁾ これら原石は、意識的に遺跡に持ち込まれたものでないかもしれない。他に、礫として石英 (36・37) 2点が出土している。うち1点は、めのうといつてよいものである。

(注) 西田茂の報告による。

(田中 哲郎)

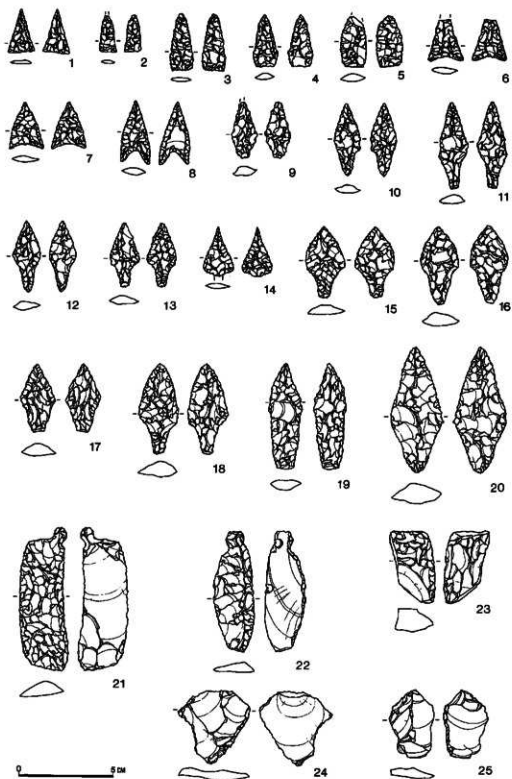
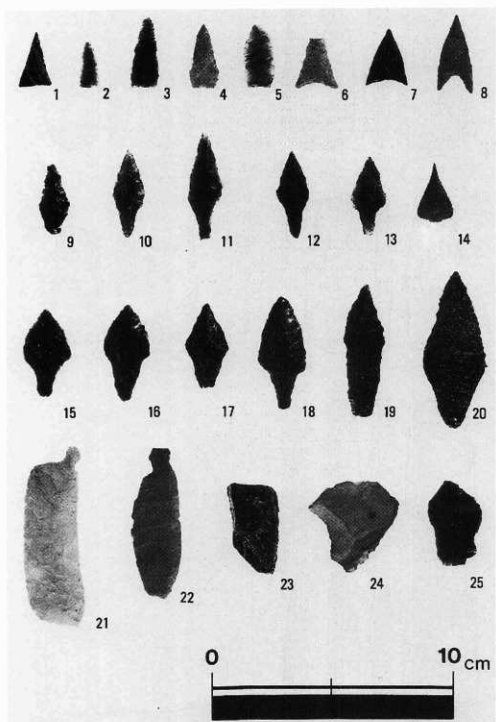
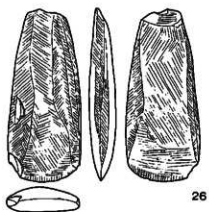
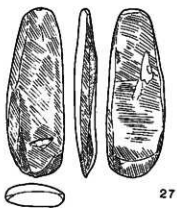


圖50 剝片石器

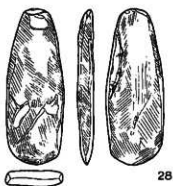




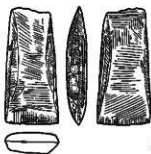
26



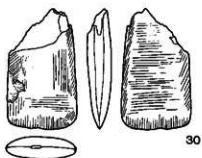
27



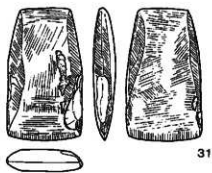
28



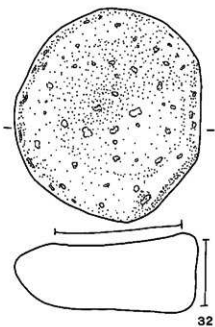
29



30

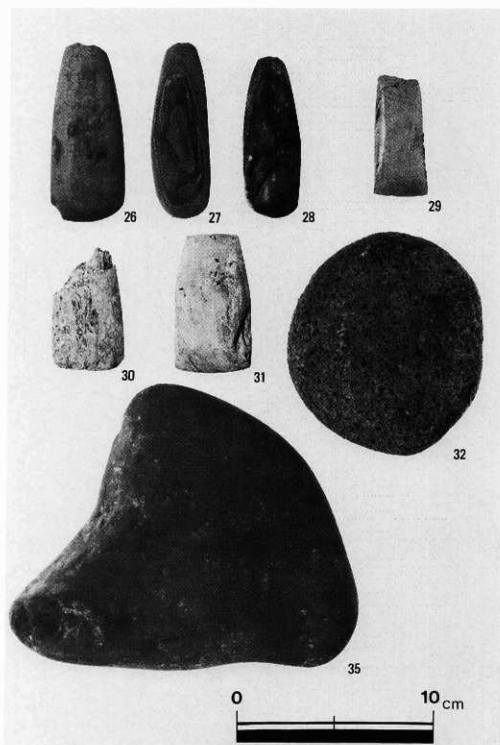


31



32

图51 燧石器 (I)



(35はH-1床面の礫)

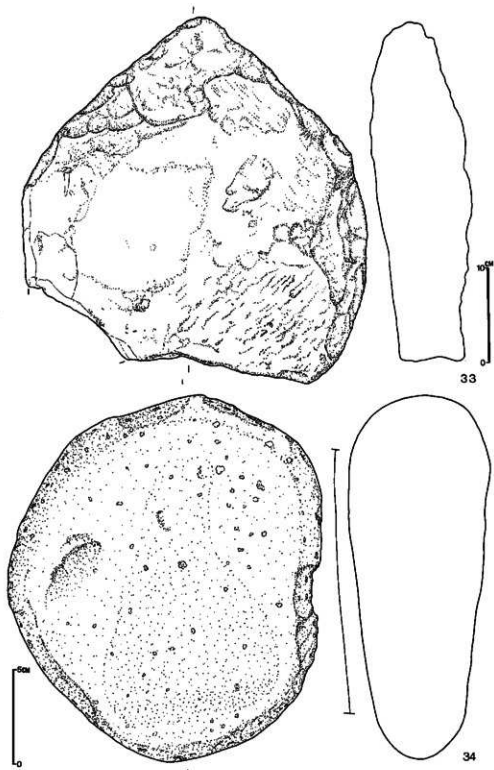


图52 磨石器(2)



H-1 廳台石



台石



石美

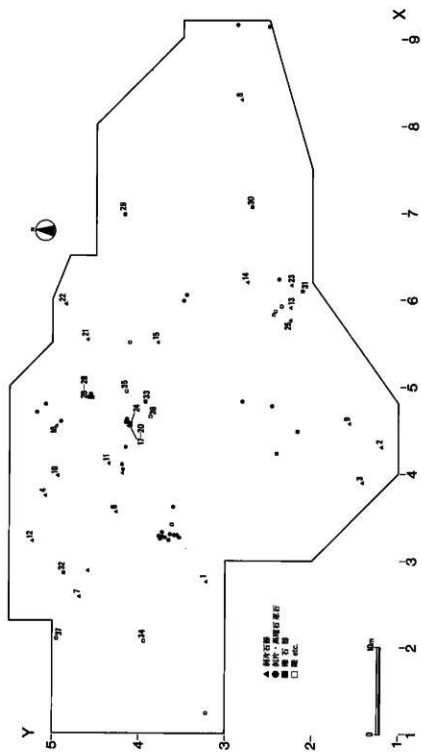


图53 石器等出土位置图

No	名称	遺跡名及び発掘区	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	材質	備考
1	石 鏃	23-72	II	23.3	14.0	2.8	0.6	黒曜石	
2	"	41-31		(19.4)	9.0	2.3	(0.6)	"	
3	"	31-94	II	29.8	12.0	2.5	1.0	"	
4	"	35-70	IV	27.2	12.8	3.3	1.0	頁 岩	
5	"	25-08	(C期)	(26.9)	13.3	4.5	(1.8)	黒曜石	
6	"	34-52		(21.6)	18.3	3.3	(0.9)	頁 岩	
7	"	24-46		24.5	17.8	3.6	1.1	黒曜石	
8	"	82-38	(C期)	33.5	15.3	3.6	1.6	頁 岩	
9	"	41-55	II	(29.7)	13.0	5.4	(1.8)	黒曜石	
10	"	34-99	"	37.7	13.6	5.4	2.1	"	
11	"	44-13	"	45.6	15.2	5.6	3.0	"	
12	"	35-22		37.2	14.0	5.1	1.9	"	
13	"	H-2 (52-92)	覆土6	33.3	15.0	4.7	1.8	"	
14	"	62-17		(24.4)	15.2	3.3	(1.0)	頁 岩	
15	石鏃・石鉞・ 両面加工のナイフ	53-57	IV	37.6	20.6	5.0	3.8	黒曜石	
16	"	44-59	"	40.7	19.8	6.8	4.4	"	
17	"	44-51		35.8	18.3	7.2	3.4	"	
18	"	"		47.2	20.2	8.5	6.1	"	一括出土 H-1跡
19	"	"		55.6	17.3	6.8	5.8	"	
20	"	"		65.7	27.0	10.0	12.4	"	
21	つまみ付ナイフ	54-55	IV	75.9	26.0	11.7	15.7	珪質頁岩	
22	"	54-98	"	63.7	21.3	5.5	6.6	"	
23	スクレイパー	62-12	"	38.0	24.5	12.8	10.8	黒曜石	
24	"	44-50		38.6	38.0	7.2	6.8	頁 岩	
25	"	52-72		36.0	23.3	6.8	4.0	黒曜石	
26	石 斧	H-1 (44-85)	床直	90.4	38.4	13.7	79.0	緑色泥岩	重なりあって出土
27	"	"	"	88.9	30.5	12.0	53.2	"	
28	"	"	"	82.4	30.0	7.3	50.7	黒色片岩	
29	"	64-91		62.4	27.8	11.0	32.0	珪 岩	
30	"	72-06	IV	63.0	37.3	12.8	41.0	珪質凝灰岩	
31	"	62-11		70.0	39.9	12.2	59.0	"	
32	ナリ石	24-88		110.7	97.1	35.3	700.0	安山岩	
33	石皿 or 台石	43-89		366.0	385.0	112.0	18,500	"	H-1跡
34	台 石	23-09	(C期)	18.5	15.9	7.4	3,620	"	
35	鏃	44-91		17.0	16.5	2.5	980	珪質頁岩	H-1床直
36	"	43-68		5.0	1.3	1.2	7.5	石 英	
27	"	24-09		(2.7)	2.6	(2.0)	15.6	メノウ質石英	

表5 掲載石器等一覧 ()は現存値

6. 炭焼窯跡(04-96-98, 14-06-09-16-19-26-29-36-39-46-48-55-58-65-68-75-78-86-88区)

南東方向に傾斜する標高60-62mの高位斜面を掘り込んでつくられている。

これは、前庭部(作業場)・焚口・炭化室・煙道・煙出しに伴うテラスからなる。全長は8.5mで、長軸方向はほぼE-Wである。東を向く焚口は、幅40cmほどで両袖に石を配している。炭化室は、焚口から奥にむかって幅広となる茄子型といわれる形態である。規模は、奥行3.2m・最大幅2.1m・面積4.6㎡を測る。この炭化室の奥壁には、煙道が掘り凹められ、煙道と炭化室との境を石積みとしている。さらに奥には、炭化室の床面から1.5mほど高位に煙出しに伴うと考えられるテラスがつくられ、煙道の延長線上に浅い皿状の小ピットを設けている。また、前庭部にあるピットは、これを覆う上屋の柱穴と考えられるが、土層堆積状況からの確証はない。

炭化室・テラスの覆土は、大きく炭焼作業に基因する層と、天井・壁の崩落に基因する層に分けられる。前者は、炭化室で硬くしまった焼土層が2枚みられ、少くとも2回の炭焼きが行われていたことがわかる。後者は基本的に、内壁の硬く固化したもの・茶褐色土・窯の外

側を覆う黄褐色ロームの層が繰り返す堆積状況であるが、付属施設では強い火熱を受けないため、硬く固化したものを含む層はみられない。

前庭部にみられる堆積土は、炭化室から連続する炭化物層(3)によって大きく2層に分けられる。これは、炭化室からかき出された焼土・炭化物などであり、各々炭化室の2枚の焼土層に対応するものと考えられる。(田中 哲郎)



煙道

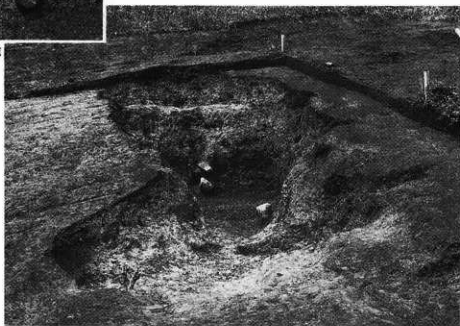


図54 炭焼窯跡(1)

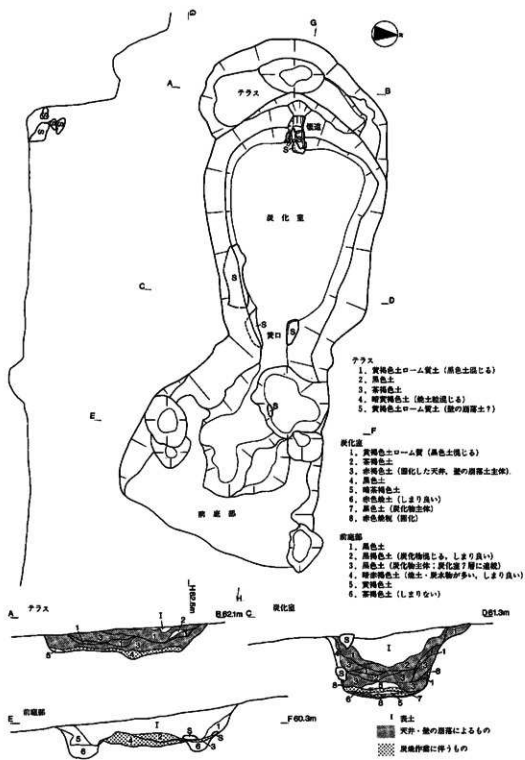


図55 炭焼窯跡 (2)

Ⅳ ま と め

現在の登別市富岸地区は、幌別市街と鷺別市街の中間をうめるように、宅地化の波が押し寄せている。それに伴い、豪雨等による河川の水害防災工事・道路建設等が行なわれ、当地区は日々変貌を遂げている。高速道路が通り、札幌圏に入りつつある当地にあって、亀田記念公園は、登別市はもとより近在市町の人々の憩いの場となっている。今回の調査は、この公園奥を走る高速道路建設に伴うもので、先に行われた、富岸・千歳4・千歳5・川上B遺跡に次いで、登別市内では5ヶ所目、そして最終の調査である。

当地が、福岡・佐賀の士族からなる屯田兵の入植により開拓がはじまったのは、明治22年のことである。本遺跡のある地は、大正15年に畑として開墾されるまでは、この開拓期につくられた炭焼窯が何カ所かあっただけで、周辺は森林の繁茂する土地であったという。昭和34年以来、故亀田光司氏の自然を残した庭園式公園の構想から、西富岸川中流部は周辺が買収され、そのためこのあたりの地形はほぼ原形をとどめている。西富岸川は、アイヌの人々から、イワ・エカリ・ナイ（山・を越えて行く・沢）と呼ばれていた。富岸は、ト・ウム・ケシ（沼・尻・の末）と解され、縄文海進の痕跡である、海岸までの沖積平部の一部を形成していたことを物語る。古くはトンケシコタンがあり、伝説によれば、大津波でコタンが全滅したとある（知里・山田 1958）。遺跡のある斜面が、採集・狩猟地となりはしても、そこが居住地となったのは、大正15年、旧土地所有者の小林太郎氏一家が開墾するまで、縄文時代中期以来、悠々の時を経っていたのではないだろうか。

亀田公園遺跡は、縄文時代中期後半葉の集落跡である。切り合い関係から少なくとも、二期に分けられるが、時間差はなく、連続性のあるものと考えている。土器は復元できるものがなく、磨耗している破片がほとんどであるが、概ね、大安在B式・柏木川式と類似したものである。当該期の集落は、周辺ではいまだ確認されていない。川上B遺跡A地区AH-5は、覆土に当該期の前後の土器を含んでおり、この時期の所産と考えられる周辺では唯一の遺構である。遺物では、わずかに川上B遺跡・千歳4遺跡・千歳5遺跡・富岸遺跡・白老町虎杖浜4遺跡から、柏木川式の土器が出土しているのみである。当該期の遺構を、勇弘・石狩低地帯まで目を向けてみると、恵庭市柏木川遺跡の住居跡や、厚真町厚真8遺跡の住居跡と土壇・苫小牧市久米井遺跡3号住居跡が、これにあたるものと思われる。この後の中期後半葉（中期末）になると、川上B遺跡・千歳4遺跡・千歳5遺跡・室蘭市水元遺跡等から、遺構・遺物の良好な資料が得られている。住居には石囲い炉をもつようになり、囲いのない地床炉である当遺跡等の遺構とは、明確な違いを示すようになる。換言すれば、住居の石囲い炉の有無をもって、縄文時代中期でも、より中期の様相をもつものと、後期への前段階のものとし、住居を規定できるということである。その点では、当遺跡は、前出の厚真8遺跡とともに、中期において石囲い炉をもたない時期の最終段階の集落の資料として、重要なものであるといえよう。厚真8遺跡においては、A地区1号住居跡が、平面長方形で壁柱穴や大型の炉をもつなど、当遺跡H-

1と近似した状況を示している。

当該期を、亀田公園遺跡に限ってみると、住居跡からは、連続性のある2つの時期に分けられよう。すなわち、切り合いによって古い方とみなさせるH-6と、同様に外柱穴をもつH-5・H-3の3軒が古段階。H-6より新しいH-4とH-1・H-2の3軒が新段階である。P-18がH-3より古いことや、P-5がP-4より古いことも、切り合いから証明され、土壌・焼土を含めた遺構は少なくとも、3段階に分けられよう。土壌は、P-1・9・17が他の遺構からやや離れた位置にある他は、すべて住居跡の周辺にある。P-18を除けば、いずれかの住居と関係のある土壌であろう。これら遺構の立地が、湧水地点とその流れ沢を避けた位置にあり、降雨後の影響も少ないことは、先に述べた。通常はこの水源を利用して生活を営んでいたと想像される。

遺物点数からみると、石鏃の多さが注目される。居住区外に多いことは、狩猟場としての意味があるのだろうか。また、早-前期の様相を示すつまみ付ナイフや、後期のものと思われる石鏃が発見されていることは、中期以前・以降とも、周辺をふくめたこの地が、何らかの形で利用されていたことのみかであろう。

縄文時代中期後半前葉の一時期に、この地で生活を営んだ人々は、その後、これよりも下流かあるいは川上B遺跡などの周辺へ、よりよい生活環境を求めて、その時代を生きていったものと考えられる。石圍い炉をもつ住居が、登別市域に限っても、飛躍的に増加することが、それを物語っている。

(三浦 正人)

引用・参考文献

- 宇田川 洋 1979 「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼遺跡群』樺太町教育委員会
大島 直行 1979 「伊達市の遺跡」伊達市埋蔵文化財包蔵地分考調査報告 伊達市教育委員会
大島直行・瀬川拓郎 1982 「札内台地の縄文時代集落址」登別市千歳6遺跡発掘調査報告書 登別市教育委員会
大谷 敏三 1982 「北海道における縄文後期の集落」『考古学ジャーナルNo.203』
大場 利夫他 1962 「室蘭遺跡」室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館
小笠原忠久 1984 「北海道西南部における縄文時代前・中期の集落」『北海道の研究 考古編1』
倉谷孝典・小笠原忠久 1972 「大空在B遺跡」上ノ国町教育委員会
榎谷進夫・山本雄三・小出成基 1974 「登別町の木炭生産について1」『北海道開拓記念館調査報告』6
北海道埋蔵文化財センター 1981 「社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡」北海道
埋蔵文化財センター地区埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報1
<中村福彦・榎谷孝典・西田茂・青柳文吉他>
1983a 「川上B遺跡」北海道埋蔵文化財センター地区埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報13
<畑宏明・越田賢一郎・西田茂・遠藤香登・佐藤伊敏・熊谷仁志・大橋秀規・三浦正人>
1983b 「千歳5遺跡」北海道埋蔵文化財センター地区埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報12
<木村尚俊・鬼柳彰・浦辻保治・工藤研治・和泉田敏・佐藤和雄・大場靖友>
1983c 「虎杖浜3遺跡」北海道埋蔵文化財センター地区埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報11
<森田知忠・佐藤剛敏>
1985a 「登別市川上B遺跡」北海道埋蔵文化財センター地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書 北理調報20
<鬼柳彰・西田茂・立川トマス・花園正光・藤秀之>

- 1965b 『登別市千歳5遺跡』北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書 北理調報21
- 〈鬼柳彰・西田茂・和泉田敬・中田裕香〉
- 1965c 『礼文島幌泊段丘の遺跡群 東上泊・上泊3・上泊4遺跡』道々礼文島線特設1軌工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報19
- 1966a 『登別市川上B遺跡・C地区』北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書 北理調報27
- 〈鬼柳彰・西田茂・長沼孝・田口尚・和泉田敬・花岡正光・森秀之・石川朗・中田裕香・中村千寿〉
- 1966b 『北海道縦貫自動車道埋蔵文化財事前発掘調査報告書』室蘭工事事務所管内(亀田公園)
- 佐藤一夫・工藤豊・宮夫晴夫・渡辺俊一 1978 『北海道苫小牧市植苗久米井遺跡発掘調査報告書』苫小牧市文化財調査報告5 苫小牧市教育委員会他
- 高橋 和樹 1975 『S253遺跡』『札幌市文化財調査報告書』II 札幌市教育委員会
- 1976 『泉苑遺址』『札幌市文化財調査報告書』VII 札幌市教育委員会
- 高橋和樹・内山真澄・上野秀一他 1975 『札幌市文化財調査報告書』II (N309遺跡) 札幌市教育委員会
- 高橋和樹・内山真澄・加藤邦雄・上野秀一 1977 『札幌市文化財調査報告書』XVI (N309遺跡) 札幌市教育委員会
- 高橋 正勝編 1971 『柏木川』縄文時代・縄文時代中期の墳墓と縄文時代中期の住居跡 北海道文化財保護協会
- 高橋 正勝編 1980 『縄文文化前期・中期』北海道考古学講座
- 高橋 正勝編 1982 『葦ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV 江別市教育委員会
- 田才雅彦・大沼忠孝・千葉英一 1983 『南緯府5遺跡』北海道立伊達緑丘高等学校建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北海道文化財保護協会
- 知星真志保・山田秀三 1958 『滝別町のアイヌ語地名』地名の由来・伝説と地図
- 登別町史編纂委員会 1967 『登別町史』登別町
- 登別市史編纂委員会 1985 『市史 ふるさと登別』登別市
- 〈街道重昭・倉沢保文他〉 1986 『やさしい史話 登別の歴史』登別市
- 登別市 1984 『亀田記念公園碑文』
- 1985 『レクリエーション都市 登別』市勢要覧1985
- 花岡正光・福田正巳 1983 『川上B遺跡周辺の地形・地積物と斜面の地史』『川上B遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 北海道火山灰命名委員会 1982 『北海道の火山灰』
- 北海道教育委員会 1977 『美沢川流域の遺跡群I』新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 1978a 『美沢川流域の遺跡群II』新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 1978b 『広島町大曲B・C遺跡』北海道縦貫自動車道(北広島～札幌南)埋蔵文化財包蔵発掘調査報告書
- 松谷 純一 1986 『水元遺跡』室蘭市教育委員会
- 宮夫晴夫・渡辺俊一 1986 『厚真8遺跡』『苫小牧東部工業地帯の遺跡群I』苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 宮本長二郎 1983 『古代の住居と集落』『龍橋』講座日本技術の社会史第七巻
- 1984 『縄文時代の墓穴住居』『學科考古学』第7号 縄文人のムラとくらし
- 室蘭市史編纂委員会 1981 『新室蘭市史』第1巻 室蘭市
- 森 秀之 1985 『N A地区の調査 3 昭和58年度の調査』『登別市川上B遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 山本 雄三 1973 『泉地の足跡をたずねて』『北海道開拓記念館だより』3-2
- 山田 秀三 1979 『登別・室蘭のアイヌ地名を尋ねて』
- 横山 泉・藤井敏雄・大場孝志男・江草幸雄 1973 『有珠山-火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策-』北海道防災会議

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第38集

登別市 亀田公園遺跡

— 北海道埋蔵自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 —
昭和62年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南26条西11丁目 TEL(011)561-3131
印刷 鶴総北海 札幌支店
001 札幌市北区北30条西5丁目 TEL(011)757-6995

本書は日本道路公団のご了解を得て増刷したものです。

